西部亞弗利加探險

長田秋濤譯

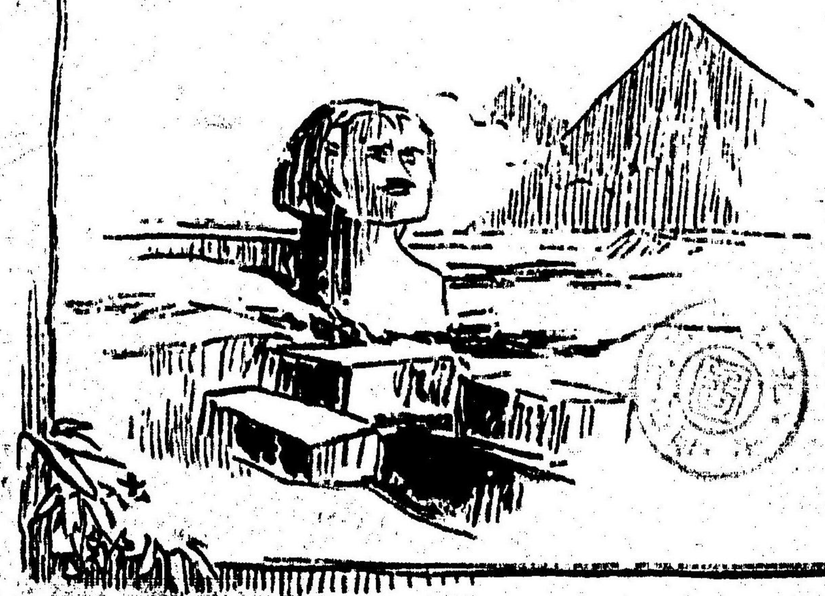
81
485

秋濤氏が十二大譯述の一編として西部亞弗利加の風景、土俗、動植物の奇觀を紹介す。千古人跡を絶ち、天地寂しく靜なる處、無數の象群深邊に遊戯するあれば、熱沙原上駝鳥の徘徊するに滿ふあり。黑奴の生活、隊商の行旅、覩しく覩るまゝを記して讀者をして自ら此蠻地を踏なの思からしむ。壯麗常一樣の地理誌の如きものならんや。

西部亞弗利加探險

長田秋濤譯

春陽堂發行



81-933

西部亞弗利加探險

長田秋濤譯述

第一章

千八百七十二年一月二十七日、遂にサンルイを眺めて海岸を距る少許の所に碇泊した、見渡した處岸は際限もなき低き砂地であつて林の影を明かに眺むることが出來る、しかし半は白砂に埋もれて、只僅に煌々たる太陽の光に打たれて、白く光れる高き建物が二つ三つ聳えて居る、サンルイはセネガルの佛蘭西領の首府で、河と海との中央に立てられ、首は一種の島嶼中に立てられたものであつて、長さは二千米突、幅は百五十米突より二百米突に及ぶ、千六百三十七年に此地を攻撃されて首府にせられた、以來、無數の家屋は建築され、今日に在つては總督府の

所在地となり、殖民地商業上の中心點となつて居る、

予がセヂガルの事に付いて茲に贅せざる理由は蓋し彼のフローリオ、ド、ランジル海軍大將が既に非常な大部に亘る著述があるに依て、敢て喋々しないのである

予は船中に宿し、多年希望せる亞弗利加の景色を賞した、翌日早朝より黑き布を纏ひたる、軀幹長大なる四人の黑奴が頭に同じ色の帽子を被り小艇を漕ぎ來るを見た、此衣服はブーブーと稱へる幅廣き襯衣の如きもので、足にまで及びたるセヂガル人の一般の衣服である、其乘り來れる船は丸木船で、縱令浪は荒くとも危險は殆どないやうに見受けられる、是等の黑奴は吾々に總督よりの手紙を出し且つ新鮮な魚類を出した

午後六時、吾々は錨を扱ひてダカールに進んだ、翌朝遙に綠岬の半島を眺めた、此半島は最も平坦であるけれども、岬の處に至つて峻險なる絶

壁となる、即ち此絶壁が綠岬である、けれども予が此處を見た所では、寧ろ眞色岬と命名して宜い位で、總ての植物などは色なく、遠き山は眞色を爲して此褐色の中に現はれて居るに過ぎない、此半島の南岸は平圓形をしたる、廣大なる、且つ安全なる海岸であつて、其一隅にダカールを認める、ダカールの正面にゴレーと稱する島嶼がある、是は來た眞正の領地とは言はれなかつたが、フランス軍の時代に於て、全く此半島は佛蘭西の版圖に屬し、工兵は此地に來つて測量などをして其地圖を作つたのである、同時にカロール、シース、サルームなどの國王又は酋長を慰撫せんが爲めに一の遠征軍を起されて、千六百七十九年有名なるシュカス氏は、佛蘭西と是等の國との締盟條約を爲して綠岬よりサルム河畔に至るまでの主權を握ることになつた、此條約に依てフェーグルブ將軍は遠征隊又は義勇兵の長となつて、山河を跋渉し、國旗を揭げる者を討ち平らげて、此地の平和の基礎を固くした、然るに是より後

幾度となく暴徒起り、殆ど之を討伐するに苦んだ事實は、讀者は、思より後に知ることが出來るだらう

ゴレーは繊岬の首府である、此處には特命司令官が駐在し病院を始として種々なる商店なども開かれて居る、此島の上には駐劄軍隊を保護するが爲に城壁が築かれてある、一般にゴレーの市街は狹く且つ屈曲して朝の十時より午後の五時までの間は、火燵中に居るの感がある、若も一朝傳染病などが此地に起る時は、實に其危險なることは名狀すべからざる程であらう、又此地の人口は比較的多いが爲に、此地に駐劄する白智人種は餘裕なく瞬間を爭ふて健康地に逃出さなければならない

二三の水は軍司令官の宿舍の前に蓄々として清風を起して居るけれども何となく、悄然として、豐土に於ける植物の如き姿をして居らぬ、又島には井戸はなく僅かに雨期に際して、地面を堀つた水溜の中に溜れる水を以て、日々の供給に充て居るのである、尖故に時としては水溜れの爲に土民は非常に苦しむ、爲めに政府は一の水船を以て他處より水を運んで之を分配する斯の如き不愉快千萬な地であるけれども、予は此處の人民より大いに歡待を受けたる點に於ては、又一種の愉快を感じたのである、予は長くゴレーに滞在することが出來ない爲めに、三時頃にダカールに赴いた、此處はゴレーと違つて殆ど見るべきものはなく、只市街と云ふ形をして居るのみである、既に予が既きたる如く此地の政府はゴレーに在つて、ダカールには僅かに郵船會社の代理店が一軒作られてあるのみである、

予はホテル、ド、グ、マリーメに投宿した、此ホテルはケーラールと名けたるスパイの退職少尉の所有であつて、親切にして且つ旅客を待遇する事が厚いと云ふことであつたが、果して其首に違はず、此主人夫婦は予を冷遇せざるのみならず、金錢の點などに於ても非常に注意して呉れ

て、予が病氣の時などは、吾が子の如く介抱して呉れた、此地に滞在中に、此ホテルに來たものは、僅に二旅客のみであつた、それは船より下りて、晩餐を喫せんが爲に來りたる二人の英國人であつたが此ホテルの主人は一食事に就て二パウンドを請求した、然るに彼は平然として支拂つたが、其食事は十法の價もしない位のものである、然にホテルの主婦はそれを見飽ねて旅客に餘り高價の晩餐料を拂はしめることを主人に諫責した、所が主人の答へるのに、是は一の復讐である、今より數月前予は妻と共にドーブルに旅行して晩餐を喫したが、殆ど四十サンチームにも價ひせざる物に對して二パウンドを拂はしめた、予は其高價なるを責めず之を支拂つたが、他日此地に來る英國人あらば、必ず其者に對して復讐せむと云ふことを誓つて居つた、然るに今日の事で滿足したのみならず予が無從に支拂ふた金は、予が滞留に戻つて來たと、予はダカールに數ヶ月間滞在する目的なるが爲に一軒の貸家を求めんとした、主人は予が爲に一人の案内者を附して呉れて、諸所を探索したが、此市街は砂地であつて歩行の困難は實に名狀すべからざる程であつた

黑奴の住宅の中央に、二三の歐羅巴の家屋が建築されて居る、先づ歐羅巴人の家屋としてあるけれども、獨にも言へる如く大なる建物は郵船會社の代理店を始めとして特命領事官がダカールに來りて宿泊する宿舍及電信局其他兵營位のもので監獄署及び博物館などもあるが、此地に暇亂ありし以前とそ、此博物館の如きは特に監督者の下に屬して居たれ、今日では識能なき警察官に其鍵を預けられたが爲、殆ど荒廢に屬して居る、此處には隨分人種學又は人身究理學上の好材料が現存して居る、其他木造の家屋又は混血人の家屋を始として、黑奴の家などがあるが此黑奴の家は實に言語に堪えたる有樣を呈して居る、

予は此ダカールに於て有權者の一人を諸君に披露するのを忘れたが、

是は此地に旅行する者に對しては一大奇觀である、それは此地の王である、郵便船の此地に到着する日は、彼は其妻と共に旅客を引見するが、其度に十五サンチームの金を要求する是が彼の一の財源である、

ダカールに於て最も美麗なるものは庭園である、此處にはセネガルに於ける珍奇な草木を集めたるのみならず、亞米利加などの植物も繁殖して居る、日中は虫類が多いが爲に之れを蒐集せんが爲に小々逍遙した

予が司命官を訪問せる時に司命官は、予が此セネガルの地に來りたる目的の如何を問はれた其目的は博物學の蒐集を試みんとし、且内地を探險せんとする目的であると答へた、然るに氏は其困難なるを說いて、頻りに予が目的を斷念せしめんとしたけれども、予は決心の固きと、今日に於て其志を動かすべからざることを斷言した、是に於て司命官は親切に予を各駐在所の士官等に紹介せむと云ふ事を約せられた、併

し餘程の困難に打克つたけの事をしなければ、其目的は遂せられないと云ふことを言はれたが、予は氏の熱心なる忠告を受けて氏と訣を分つた

予はダカールに一軒の家を借りることを得たが、是には廚及小山などが附いて居つて一ヶ月五十法の家賃である此家は總て裝飾をされてあつて寢臺、其他四個の椅子などもある、直にアマゾーと呼ぶ一黑奴を雇ひ入れたが、其雇入れた晩、彼が予に自分の身の上を語つた、それは一奇話と言ふて宜い位であつて、彼は佛蘭西人の爲めに生擒されたるカロール大王の息で父は遂に生擒中に憐れな死を遂げたと云ふことである加之彼は其の父の富裕なりし事を喋々して止まず、最後に、煙草を買ふ爲に五錢の金を給せられむことを強んだ、予も是れには花然とした、予は此僕に告ぐるに、爾來一言たりとも虛言を吐けば給金を與へないと云ふことを以てした、彼は實に一種の隱險的人物であつて新

來の客あれば頭を低ふして一錢たりとも己を利せんと謀る時々嗅煙巴人は彼の爲に籠絡されて仕舞ふ、彼は一種の煙嗅を持つて居つて、此人は富豪である、此人は勢力があるなどゝ云ふことを、一見の下に知り得るのである、

予は翌日より日記帳の物を拵えて予が日々の有樣を記載するに勞めた讀者諸君も却て之を讀まれた方が面白味があるだらうと考へるから左に記して見樣、

二月一日、早朝眠が覺めると非常に寒氣を感じた、予は別に熱病に罹つたやうな感じもないが、直に寒暖計を檢すると僅かに十一度である、航海上の用意として持來れる大外套を身に纏ふた、付て佛蘭西に在る時分、予が友人等は彼の地は熱度酷烈であるから殆ど人躰を燒かれる程に感じるだらうなどゝ云ふ事を言ふたが、全然其言葉とは反して居つた

二月一日より十日迄の間は記すべき事はない、狩に出て一の珍鳥を得たが剝製にすることが出來ない、此鳥は全身白毛で黃色の喙を持てる來た曾て見ざる一種の鳥である、是は此地の窩地の彷で得たので窩は煉化石を以て拵はれてあつた、其の卵は狐の類が襲ふて來て、死骸を殘して食ひあらすが爲に高き塀を作つて其の豫防をして置くのである

二月十日、予はゼット氏と共に郊外散歩を試みんとした、氏は妻帶のみならず、小兒及乳母を引き連れて居つた、吾々は二頭の馬を持つて居つたから是に乘じて往くことになつた、其目的はマメルと稱する所の瀧まで往く考へである、マメルと云ふのは槍岬を形くる海に突出した所の、最も高き二つの丘である、此邊は實に航海上最も危險なる所で、霧の深き時分には槍岬の燈臺の光明は明かに見ることは出來ない、夫故に第二の燈臺を作つて努めて危險を避けることに注意して居る、

予の連れたる一隊は家屋を以て成立つて居つて、器具又は食料を携へて居る、ダカールを出てから郭外の原野を進んだが此邊の砂は非常に細かくして脛の半ばを埋めるので歩むに非常な疲勞を感ずる加之太陽の輝きは酷く砂に反射して、キラ〳〵するが爲、双眼は爲に眩ませられるので、且つ路と云ふた處が原野の中央に在る小徑で殊に一面原漠なくして眼に入る植物さへない、七月より十一月の時分には蝿が繁殖ずること夥しく、二米突以上の高さに及ぶ尖故に此砂の中を歩かないで水の中を行くやうにするが、若し雨が多くして水嵩が增して居る時分には、小さな板などに乘つて通る、又火山質の岩石が諸處に現はれて居るのを見たが、此半島の土壌は是等の石で疊まれてあるものと信じられる、木などはなく、僅かに水溜りのある所だとか或は小川の近傍に至ると棕梠の樹を見る位である、此木は黑奴の爲に油を供給するのみならずして、酒を製することが出來る、是等は最も此地方の土民に對し

ての飲料物として賞觀されて居る物品である、

吾々は高丘の中最も小なる者の麓に在る大なるバオバッブ樹の蔭で食事をする爲小憩をした荷物を解き食事の準備を爲し、且は其近邊に生茂れる草などを刈つて漸く準備を整のへ扨て食事が濟んだ後マメルの煙管を見に往つた、伴ひ來れる黑奴の乳母は、自分の親族が此近傍に居るが爲に、それを訪問する暇を與れろと云ふことであるから之を許した、彼が出掛けるに先つて化粧をする事になつたが、其化粧たるや實に驚くの外はない、先づ第一に汚なき衣服を着し、それより次第に美しき衣服を着る、其數は九枚に及んだ、彼はそれを着てから恰も神女の如き心持になつたと見えて、頭上には三十度以上の太陽が腦漿を沸すやうに照して居るのも一向關はず、傲然と出掛けて行つた

吾々が進む路には荊棘などがあつて、之を越ゆるには非常な困難をしなければならぬ、殊に此の藪中にはシャチーグルと呼ぶ猫の如き獸、其

他吾々がまだ甘て見ざる所の廃などが居ると云ふことであるが、是は中々捕へることが非常に難い漸くにして此險阪を登り燈臺の見える平地に辿んで來ると、吾々が來るのを見て、燈臺の番人及び其長が出て來て、燈臺の中へ吾々を迎へ入れた、此長は燈臺を斯の如くに注意を加へ清潔にして守つて居ると云ふことに就て自慢をしたが非常な親切な人で何故食事の時刻に此地へ來なかつたと恨を言ひ、又數日の中に此近處で獵を催ふす故是非數日間の暇を作れと云ひ、のみならず吾が爲に殿蜜などを用意してくれた、

吾々は燈臺に登つて其中の構造などを見たが、此燈明臺の光りは三十哩を照すと云ふ事である階段を辿ぢて高き所に往くと、此邊の四方の氣色は殘る隈なく眼中に入つて、北より吹き來る涼しい風は袖を拂ひ肌粟を生ずるやうに感じられた、脚下には斷崖絶壁が聳えて居つて、アルマダーの極點には怒濤激して池を飛ばす其の壯觀は名狀するに

言葉がなひ、左方にはダカールが見え、アルマダーの海岸には小さなる島が現はれて居る此島はマトレンと呼ぶ島でありて、ダカールの牧師は是非此島に住ふと云ふ考を以て幾度となく試みたけれども長く此處に居つた者は一人もない、何故であるかと問へば、甲は氣候が猛烈の爲めであると云ひ、乙は非常に蛇が居つてそれに堪えられないと云ひ、又丙は交通の便なく時としては食事などに難儀して數日の間飢を凌ぐといふことがあるからだと言ふ此島の外には洋々たる大海原が横つて居る、吾々は之を見物して、ダカールに向つて歸つた時は午後の五時であつた、

二月十一日、終日家を出ずして、窓下を通るクリヨに耳を傾けて日を暮した、是は黑奴のクルツアドーと稱するやうなものであつて、歐洲に於ける中世紀時代に唄ひながら市街を歩いて人の功績などを賞した歌人と同樣である、彼等が唄ふ歌は常に同じ歌で、樂器はダタールのや

うな器械である、此地方の土民は彼等を非常に腹んで禽獸視して居る決して相伴ふなどゝ云ふやうなことをしない、死骸などでさへも土民の死骸の側らには寄らせない、尖故に彼等はバオバッツの樹の朽ちた所に死骸を抛り込むのである、斯の如くして土民等より遠ざけられる策を執る

三月十六日、寒暖計は十六度より二十度の間を昇降して居る、予は此邊に於て最も愉快に獵を試みた、面して一の大いな胴を獲たが、其羽を張つた長さは一米突八十糎にて、尾は犬の如くである、彼は未だ十分に死せずして、暴れまわる、予が打ちたる鉛丸は羽翅に中つたものと見える、彼が墜落すると同時に鴉は群をなして來て其他小さな胴は其側らを飛びまわる、尖故に餘儀なく復一發放つて、其中の一二羽を殺した、予が遂れて來たる僕は、予の携へたる杖銃を見て更に氣を留めないで居つたが、是れより遁んで往くと、鳥の群を見た爲、余が其杖銃を擬した

所、彼は予が杖を以て鳥を獵する形をするならんと考へたと見えて殆ど喇ける如き時戦であつた、然るに豈圖らんや、一發の砲聲の下に見んな鳥を打つたので彼は初て非常に驚いた、

其日は家に歸つて、翌日また獵に往かむとして萬端の用意をして居る所へ、僕が來て、且那さん、其鉄砲で人が殺せませうかと言ふた、ソコで予は杖銃や鉛丸や鉛彈などを見せる所、彼は非常に驚いて、私が斯の如き物を持つて居つたならば、容易に人の二人や三人を殺して仕舞ふ事が出來ます、と言ふた嗚呼彼も一種の狩猟なる男である、

昨日一の漁船が此地に着いたが、予は船の碇泊すると同時に、一種の面白き事を見物した、其れは其船が岸に到着すると同時に、此邊の黒奴の子供等が船の周圍を取捲いて、或は船に登る者もあつたが、彼等は銅貨を海に放り込んでもらひ、それを拾はうと云ふことを請求して居るのである、其容子の面白きこと、終日見ても飽ぬ位である中には意外の金

を貰ふとして船底を潜つて見せるのもある、實に彼等は斯の如く危險を冒すのみならず、此邊には鮫が澤山居ると云ふことであるのに、身命を惜する事のないといふのは珍らしいことである、併し殷々樣子を聞いて見ると、是等の獸類は非常に物を怖れる性質であつて、第一此入口の波防に當る浪の音や其他種々響がするので餘り近くへは寄つて來ないと云ふことである、

二月二十日、予は今朝女黑奴が、水を持ち來るのを見た、其婦女は何れの者であるかと云ふことを僕のアマヂーに問ふた、然るに彼の答へるには、「アレは私の補助です、私は男でございますから水などは運びませぬ、あんな事をするのは女の役なんです、斯の如く言ふた、此に至つて此僕は予の傍へ來て、如何にも何か請求したいと云ふやうな風をした、予は明日はタバスキーと稱へる一の祭禮であると云ふ事を知つて居るから、乃ち此祭禮に往く爲一日分の休暇を請求するのであらうと考へた

から此方から先んじて問ふた所が、彼は如何にも其通りであると答へた、然らばタバスキーはどう云ふ事をするか、其樣子を全然話して與るならば無論喜んで一日の休暇を與へようと言つた所が、彼は唯々諾々として談話を始めた、

タバスキーはマルメタンの祭禮である、羊又は野牛を一年間十分に飼育して置いて、其日に屠殺する、而して其夜は之を食事にして愉快を盡くすのである、其翌朝は朝早くから齋戒沐浴して、九時頃皆な打ち連れ立ち國王を頭として海岸に往つて禮拜する、而して是が濟むと大なる家鶏を殺して滿腹に至るまで食する、然る後散歩するとか舞踏するとかの運動をして疲れて腹部に餘裕がなければ、歸つて來て又食べる又眠などを招んで歌を唄はせる、

斯くの如くすること三日間、疲故に富んだる者は非常に盛大な宴を張るので貧しき者は其富んだる者の家に往つて共に食べる所の特權を

持て居る、此風習は決して祭禮の時ばかりでない、黑奴の風俗の特性であつて、平時でも同じことである、例へば一外國人が黑人の家の前を通る而して飢を感じた場合には直に其家に入つて彼等の前に坐ることが出來る而已ならず彼等は是に坐を讓らなければならぬ、此外國人は何れより來たか、何者であるかと云ふことを問もしない、

予が度々見たる所に一奇談があるが、一人の黑奴が僅に一錢の金を持つて晝餐を喫せんが爲に一個のビスケットを買つた、然るに此處へ他の者が來て、彼がビスケットを食べて居るのを見て其前へ坐る、坐つた以上は已れは空腹に堪えられむでも坐はつたものに分けてやる、夫故に麵麭屋などへ黑奴がビスケットを買ひに來て、さうして主人に依頼するのに、切賣誰にも見へないやうな所で、此ビスケットを食べさして下さい、私は非常に飢えて居るから人に食べられては堪りません」と云ふやうな事を以てすることが屢々あるさうだ、

二月二十五日、此日予が朋友なる工兵大尉シャトー氏とマメルに散歩を試みた、予は極めて溫順なる馬に乘り、正午頃に煙蓋の下に往つた、而して煙蓋長が招待せし懇篤なる意に甘へて、二三日間此處に滯留することになつた、此日寒暖計は三十度以上に昇つた、予がセヤガルに來てからの最も暑い日である

二月二十六日、日の昇ると共に起床し、黑奴を連れて家を出た、昨日に比すれば鳥類は非常に多い、併ながら刺棘が高く聳つて近よることが出來ない、此日は漸く一の美しき銅色せる、ヴンヂオロリュス、スプレンダス（鶯の類）を獲た、然るに此鳥の叢中に落ちた爲、之れを取るには非常に困難をした、斯の如くしてイロフと稱するアルマヂーの近邊まで進んだ、然るに予は空腹を感ずることが非常で、殆ど死に瀕する位であつた、幸ひにして一人の婦人に新鮮なる鷄卵を與へられた爲、漸く蘇生の思ひをした、

予の伴らに居る人が國王に見ゆることを願むならば謁見が出來るやうに取計はうと云ふことであつたから、予は無論之を快諾した、すると彼は直に馬車を馳せて國王陛下の許に行つて此事を通じた、陛下は直に衣服などを著替えられて化粧をされた、然るに此待つてる間が非常に長い故、予は馬に風を當てんとして、此處を立出でた、暫くして歸つて見たが、まだ國王の用意が出來ないと云ふ事を聞いたから、最早待ちきれないで、此地を立去つた、

此邊では綿の收獲があるやうであるが、併し氣候に適しないものと見えて樹は矮小である、過むに從つて茨などを以て圍まれた畑を見る、其中には玉蜀黍などが生えて居るが、此邊には盜賊が多い爲に、斯の如き事をして防ぐものと見える、

漸くにして大マメルの麓に到著した、予は此路を過ぐるのに殆と三時間を費すから近道を通らうとしたが、僕のアマダーは承諾しない切り

に予を遮ぎる、予は之を肯かずして遂に十五分間ばかりで頂上に達した、午後三時半、ダカールに歸らむとして出立した、予は先づ僕のアマダーをして、予が蒐集品などを携へて先發せしめ、自分は馬上に於て逍遙しつゝ且つ獵を試みつゝ歸らうとしたが、五時に至つてもアマダーは予の伴を離れない、餘儀なく予は彼を殘して過むことになつた、此中に日は暮れる、蛙の聲は雨の如く聞える、詮方なく馬上に眠りながら、漸く吾家に達した、

三月二日、レカー氏と共にハン近傍を逍遙した、夜中より家を出發した故、午前一時頃ブレーの舊埋葬地なるベレールと稱する所を過ぎた、此處には黑奴等がツラードだとか、又ヤヤベッなどを耕して居る、之を過ぎて往く事殆と數哩の所にハンの公園が在る、此公園では最も珍重される野菜などを耕して居るが、一般に沛土であつて、只醉潦として居るものは棕梠の樹のみである、吾々は此邊より頻に銃狩して、ハンの北方

に通んだ、此處で鳥を獵する事は最も容易であるが、それを拾ふの困難は一方ならぬ、荊棘の間を通ることはまだしも、水が諸處に溜つて居つて、中には此近傍の者か水浴を試むることが出來る位の場所もある、此處に一の大なる蟻の巣があつたから是非共之を穫やうとして頗り苦心したが、遂に丸にくき赤蟻が群をなして出て來たので、取ることを得ないで引退いた、此ハンの近傍には蛇の棲息すること夥しく、鳥などを拾ふ時分にも十分に注意せぬと危險であると云ふ事を聞いて居つたが、吾々は只一匹を見たのみで、それも頭だけを見た爲に直ちに銃殺した、レカール氏の話には兩脚の間を通り抜け蛇は、其長さは殆と三米突もあつたと云ふことであるから、直ちに其蛇を捕へる積りであつたが遂に影を見失つてしまつた、其日は終日狩くらしたが、漸く二三の珍らしき鳥を獲たのみであつた、

其翌日は予が未だ探險せざる所の地方に往つて狩を試みた、

四月三日、予はアルマヂーに至り、而して軟体類動物を取調べやうとした、夕刻マメルに到着して付て予が一夜を明した家に宿泊し、翌日は早く起きてアルマヂーの燈明臺に到着した、此處にはアルヂス州の人なるバンド氏が居られて、予が其家を訪ねた事を大層悦び、其一室を貸して呉れた、

朝餐を濟ましして此處を出で、岩石の間を通つて、干潮を擧ひアルマヂー邊に於て最も多く產すると云ふ軟体類動物を拾はうとした、然るに世の中の人の青藥は過大に過ぎて居て、只僅に其一部分を得た位のものであるし、しかし、獲物の中で最も面白く感じられたのは、珍らしき二三の章魚であつた

翌日吾々はアルマヂーの南方なる海邊で予が豫ねて探險を試みんと思つて居るテクーと稱する小島の前に在るアンゴーと云ふ村に往つた、吾々が此處に往くのに付いては船を見出すのに容易ならぬ困難を

感じたけれども漸くにして極めて小なる船を得て其用意をなし而して其小艇を漕ぎ出したが幸ひに風都合も好し忽ちに目的地に到着した、船夫等は是れ迄白皙人種の往かない所であるから危險であると云ふので、足を入れないことに仕向けた依て吾々は嚴命を下して白皙人種の來た入らざる方へ往く事にした、

此島は人跡もなく、鳥など僅かに居るのみである、鷺鳩などが絶壁の凹處に巣を造つて居るが、是等の鳥を得ることは難いのである、吾々は此島の岩の際で漁獵を試した、幸に太陽も餘り暑くなく、樹木は最も高いものは七十五珊米突、以上もある、夜此處を出發して歸つて來たが、軟体動物の外に予は、ブランデュ、カラレオルなどゝ云ふ二三の鳥類を集めて歸つて來た

其翌日は朝からアルマダーとマメルとの間を跋渉して居つたけれども道案内がない爲に、大なる獲ものもなかつた、或る處の岩が海栗を以

て掩はれて居るのを見た、夫等の海栗は岩に穴を穿つて其中に棲息してみる、黑奴等は是は神樣が斯の如き穴を造つて彼等を入れて居るのだと云ふが、予の見た所では動物自身が斯の如き穴を堀つて、吾身の安全を計つて居るのに相違ない

四月十一日、ハンド氏に別を告げてダカールに歸つて來た

四月十五日、予は是より先き熱病に罹つて非常に身体を害した、來た餘病も猶に復さないがレカール氏の爲に病を力めて强に往つた、レカール氏も病に罹つて居つて餘程力がない樣であつたが、勇氣を鼓して予と共に朝の一時頃に出發して海岸を通つて進んだが、夜はまだ明けず砂は深し、馬は足を埋めらるし、岸打つ浪は白銀色を呈して濕氣を帶びた夜の景は病後の身体に不愉快を感じさせた、四時頃になつて馬を下りて獵にかゝつたが、六時頃には予は力も盡き果てて仕舞つて、銃を持つ勇氣さへなく、馬に乘つてダカールへ歸つて來た、ハンスへ着く時分

に豪狗(狼の類)が二頭吾々の前に現はれたが故に、直に短銃を擬して追かけた、短銃を持て獵をすることは實に珍らしい話であるが、始め一時間許追ひかけて手頃になつたところで、一發放つと幸ひに一匹の足に中つて之を獲ることが出來、夫からダカールに歸つたが、十九時間以上も間斷なく獵を試みた爲に非常に疲勞を感じて直に眠りに就いた、

第二章

四月二十一日、カナール少佐が司令官となつて、內地に遠征隊を發せんとする舉あるを聞き、予は直に從軍を願つた處、カナール少佐は之を快諾された、併ながら此舉たるや非常に危險なる事である、遠征隊は海軍の步兵及び教練隊を以て編成されてある、教練隊は、是非此度は戰爭に出合つて、教練中の胸を霧へあげたいと云ふことに汲々として居るが爲に、予の舞ひ込の踏む所も知らない位に悅んで居る、此外に少數の引率した四人のスパイが居る、リュアヒスクに至れば、尙ほ駱駝隊を引連れる事に略ぼ決して居る

四月二十二日、午前十時リュッヒスクに向つて出發して午後六時に到着したが、遠征隊は常に海岸に添ふて進行し、吾々も是に續いて進んだが、砂中を步く苦しみは甚しき疲勞を覺える吾々の如き騎馬すらも苦みを感ずるのであるから步行するものゝ困難はまた一層であらう

同行の士官とリュアヒスクを見物に往つたが、此處は砂中に立てられた街であるから、砂の爲には非常な困難をする、家は總て木造であつて、石造は僅かに二三に過ぎないが、是等は此地の商業家の大なるものに屬して居る

此邊に於て最も盛んなる商業品は地豆(松子仁)であるが、ベウルと稱する種族は行商隊を組んで、內地より此の地豆を運搬して此地に來る而して此地の商業上に大勢力を占めることになつて居る、之を購ふには

總て殖民地に於て流通する五法の金貨を以て支拂をする事になつて居るが黑奴は此金貨を得るや否や歐羅巴の物品を買ひ餘れる金貨は己れの指環頸環其他の裝飾品に拵えて仕舞ふ

四月二十三日、午前四時を期して進軍を始めた、午前七時にディメと稱する所に到着したが、此處はリュフヒスクよりプーと稱する地に至る中央線に位して居つて別に何も見るべき物はない、此邊は一般に平坦であつて、變化と云ふものは更になく、リュフヒスクを出て左方に當つて、將に成功せんとする城壁を眺めた、此邊は數年前にカロールの王ゲール氏が軍隊を率ゐて示威運動をした所である、併し是が爲大損害もなかつたのは、蓋し住民邊が一たび聽けば再び此地に戻り來らざる風習であるが故に、彼等をして徒に戰慄なさしむるものと考へられる、此邊には珍鳥が居らない、予の伴へる醫師の如きは、此地の南方に於て種々な鳥を見たと首ふけれども、僅かに予と同樣の數しか持歸らな

かつた、

四月二十四日、午前三時出發、此日は前日に倍する旅程を往かねばならぬ、蓋し此行路に於ては水に缺乏を來すことの甚しき爲である、道路は前日と異なく、午前七時に休憩し軍隊は是より隔たれる所に水を汲まむが爲に人を送つた、予は之を期として森林中に散策を試みんとしたが不幸にして此邊には菊爵たる樹木なく其重なる物を擧ぐれば野生無果花樹其他樹の種類位である、尤も中にはバオバッブの樹の如き二十四人の人が手を擴けて始めて之を圍繞することが出來る位なのもある、是等は此地方に於て珍らしき最大樹であるに過ひない、此地は名けてプーと稱するが、此村は一般に小さく、前には一の駐在所があつたが今日では取崩されて仕舞つた、其原因を尋ぬれば、此地方に住居する黑奴はカレールノン族であつて、歐洲人と交際を結んで居る、此駐在所は最も好獵家の一人なる下士官が監督者となつて居つたが、或朝の

こと此監督者は銃猟の爲に出發した然るに黑奴逃は其留守に何か食料を貰りに來て、此家の門を叩いた、家内の者等は其戸を叩く音を聞いても更に驚かず、直に戸を開いたが、其時恰も熟人の眠りの覺めない時であつた、スルと黑奴は家内に侵入して、出で來る者を殺し、一家を悉く壓殺したのみならず、貯へ置かれた、金錢を掠奪して立去つた、夜になつて監督官が歸つて來て其門前の有樣の何となく變つて居るのに一驚を喫して近づいて見ると、是はいかに總ての物品は何れへか取攫はれ、米に染つた死骸は諸處方々に憐れなる有樣をなして横つて居ると此慘狀に彼の監督者は己の精神を喪失して、是が爲遂に發狂して仕舞つた、而して其處を立退いて、リュッヒスクまで逃來り此地に於て長い間瘧疾病に苦しんだ、此事件以來黑奴は再び此處を襲はないが併し時々行商隊を苦しめることはあると云ふことだ

午後二時ンーを出發して、午後六時にチェーズと稱する處に到着した、

此邊の道路は工兵に依つて多少整へられしのみならず、乾燥せる沼澤に沿ふて造られた路であつて時には小さな丘などを越えなければならぬ、尖故に多少變化が多い併ながら此邊の旅行は危險であると云ふのは前に話したセレールノンの族が出沒して行商隊を苦しめるからで、又此地方程斯の如き手段を執るに好い場所はないさうだ、予が此處を通る數日前にも三四の死體が路上に横はつて居つたと云ふとであつた、しかしもう取除けられて影も形もない、只僅かにサンガルと稱する此地方の燒酎を入れた壺の破片が散在して居るのを見たのみであつた、黑奴等の言ふことに依れば、此危險なる所を無事に通過せむとすれは燒酎入の壺一つを頭の上に載せて過れば、それで十分であると云ふ、尖れは若し彼等が其人を殺せば其頭上に在る壺は墜落して、サンガルが無くなると云ふ事を非常に叙支ふ餘り彼等は人命よりもサンガルの方を貴んで居るのである、尖故にセレールノン族は頭に壺を載せ

て居る者の後に尾して往く、而して若し此者が疲勞して地上に北壺を下すと同時に、彼等は直に襲又を抑ふて殺戮を試みる、只々燒附を奪ひ去る事が彼等の常に行ふ要點である、

チューズの駐在所は、此地方に於て佛蘭西の占領して居る所の最終點であつて、一士官が此處に居る、

カナール司令官に屬する軍隊は非戸を距ること五百米突の所に陣を張つて居つたが此邊の非戸の最も大きなものは即ち城壁の左方に在るのであつて、是は數年前に其跡を絶つたソーセと稱する人民が堀つた紀念物である、以前此處にセレールノンの族が襲ふて來て彼等を此地より逐放した然るにソーセの族は此地を去るに臨んで此非戸の目に著かないやうに、木の幹とか或は小枝とかを載せて土を以て被ひ、此痕跡を氣著かれないやうな手段を執つた、セレールノン族は此處に四處のあることを發見して檢査すると、石を以て十分に疊んだ、大きな井

戸が現はれ出でたといふ事である、此の非戸は深さも深し又水も非常に清澄であつて恐らくは此地方第一の非戸に遊ひなからう

駐車所の後方に大きなる樹がある、予は此處に滯留間屢〻此樹の下で獵を試みたが、此時初めてマクーと稱する鳥を得た、此鳥は忘憂で且つ愚鈍で人を怖れず十分に彈丸の到着點まで近づかしめる

四月二十六日、吾々は午前五時に出發してガオベーズに向つた、此地は則ちセレールノンの根據地であつて、數日前に行商隊を殺したる者等の住つて居る所である、荊棘の間を分けて一人づゝ進んで漸くにして午前七時頃になつて敵の所在地まで進んだ、然るに此村は寂然として人影がない、婦女子等は最早既に逃亡して居つて、男子等は荊棘の高きを利用して其中に潛伏して居るやうに見受けられる

司令官はスパイ人の一人に四人の兵士を附屬せしめ、非戸の所在地を探險せしめた、彼等が目的地に到着しやうとする時に一發の砲聲は荊

棘の中より起つた、敵は其處に在ることを確めたけれども、吾々は是に向つては更に應砲を發しない、此清泉地に進む前に司令官は通辯を以て、決して此方は戰ひを好むものでない、夫故に汝等が平和を願ふならば好都合であると云ふ事を言はしめた、然るに彼等は此通辯を見ること土塊の如く、無禮な言語を以て答へて我に應ずる樣色はない、

餘儀なく吾々は井戸の方に向つて進まなければならぬことになつて、陣營を二百米突の地に造つた、予の如きも砲銃を持ちは持つたが、何か食料を獵することが出來はせぬかと云ふ一の考があつたからで、ソコで井戸の所へ近いて見ると井戸は孤立して居て井戸の物には諸處より鳥が集つて來て居る、大方水を飲む爲と見える、夫故に一發を以て色々種類なる數百羽の鳥を獲ることが出來樣と思ふ、斯く思ふと同時に陣營の方で頻りに笛を吹鳴したから、予は直に首を回へすと陣營の方から手眞似を以て、予の向つて往く方に敵が現はれて居る、夫故に速く

獵の中へ頭を隱せと云ふ合圖であつた、夫故鳥の方は見すてゝ、砲聲を聞く度獵の中へ頭を隱して仕舞つた、彼は吾々に向つて發砲を試るが、幸ひにして一も中らなかつた、

十五分間ばかり斯の如くして居つたが、其中に砲聲も止んだから吾々は非餐を喫し始めた、併し到底此邊で獵などは思ひも寄らないから、非眠を貪つて居つた中、午後一時とも覺ゆる頃に炮火の音で眼が覺めた、遂し此砲聲は黑奴の屯集して居る所から發砲したやうに思はれた、

四時頃に陣營へ歸つて來たが、荊棘の爲に搔き拔しられて、手足顏面血ならざるはなかつた、

此日も予は一分間たりとも無駄にせんことを怖れて獵に往つた處、忽ち砲聲が起つた、是は負傷兵を殺す合圖であつた、此日ヂヤーパーズの黑奴が來り、酋長が降伏を願ひたいと云ふ通告を齎した

四月二十七日獵に赴いた、午前十時頃に至るも獲る所甚だ少なくして苦心した、併し、ビイ（鳥の名）の種々なる種類を得ることが出來た、予の僕アマザーの言に據れば、此近傍では決して此鳥を殺さず、神鳥だとして見ることをも忌む又（鳥の名）も之と同じく不幸の鳥としてある、アマザーは之を見て、予に隨從することを望まないと言つて立去つて仕舞つた、予が獵に往つて居る間に敵より使者が來て降伏の意を表したと云ふことである、彼等が贈物として携へて來たのは鶏などであつて司令官は彼等に米、サンガウなどを與へた、此酋長等の話に依れば、昨日の戰爭に於て二十餘の死傷者を出したので、實に吾々の結果の好良なるに、戰慄して仕舞つたと云ふことである、

四月二十八日ダチーバーズを出發して、二十九日にディメの酋陣營に到着した、此地は曠漠たる原で、中央に美しき樹木が繁茂して居つた故、此樹下に陣營を張つた

四月三十日、午前四時ダルーに向つて出發した、此途中郵便脚夫などを殺した村々を十分に懲さうと云ふ策略であつた、出發する時分にアマザーが、予の傍に來て、此隊と共に彼の村々へ御出になるのは非常な誤りである、彼等はチチバースに比すれば村の數も多くして銃を有することも多いと言ふたが、士官等も恐く戰ひは激烈であるに違ひないと考へて居つたやうである、予は予が今不幸にして殺されると云ふことは予の研究上の目的を害することであるから、可成注意して敵彈を除けるやうにした

昨日司令官は通辯を彼の地に送つて、此地に來れと云ふことを言はしめた、然るに彼等は、若も司令官が會合せんとするならば、何故自身此地へ來られざるやと云ふことを以て答へた

此日は吾々が即ち其地へ赴いたのであつて、午前六時に此村の入口に達した、此の村々は吾々を距る三百米突の所であつて、小さな丘の上に

在る司令官は再、次通辯を送つて、降伏のことを勸告した、然るに敵軍の中に數日前の戰爭の模樣を知つて居る者があつて、吾が兵力の強くして敵すべからざるを知つて居た爲遂に此酋長は村内の二三の者を遣れて吾が方へ來ることになつた、ソレで司令官の許へ來るには是非共軍列を横切らなければならぬ、のみならず大砲の前を通る事となつたので彼は非常に怯いて大砲の前に坐つて切に謝罪した、

酋長は司令官に向つて速射連發銃を一覽したいと請ふた故に、少尉を呼んで速射を演じさせた、彼等はいよ〳〵驚いて到底白皆人種とは戰爭が出來ないと云ふことを陳べた、斯の如くして會見を終つて一發の砲聲を聞くことなくして此地を平らげた、まだ時刻は早い故此地を過んで、其隣村に於て宴を開した

翌日軍隊は盜賊の多き村を平らげんが爲に過んだ予は既に此邊は十分に觀察して居る故に軍隊に隨從することを止めた、而して終日獵に

奔走した、是に於て先づ遠征も終つた故に司令官はリユフムスクに向つて歸ることになつた、予は此日路を失ふて方角を解せない、漸く木に蹲ちて日のある所を見ると、是はいかに反對の方に向つて過んで居つた、速かに方向を轉じて夜の十時過刻に陣營へ歸つた、其時恰も軍隊よりは吾々を捜索せしめんが爲に人を出さんとする所であつた、留守中に予が荷などは皆な持ち運ばしてあつた爲に一物も殘つて居らぬ、幸ひに參謀士官の厚意に依て、予は陣營の中に一夜を過すことが出來るやうになつた、

第三章

五月三日、予はプレーに至りカツール司令官に對して先頃來の勉過に就き謝辭を述べ、且つガンビーに向つて出帆するに就て、其機會を得る方法を問ふた、然るにカツマンスよりリユツムニユーに往復する汽車

はあるが、ガンビーには未だ交通機關が備つて居らぬと云ふことを聞られた

予は家を出てゴレーに到着したが、海は非常に荒れて舟を殆ど覆へさんとすること幾回、又岩石に衝突せんとすること幾回、彼の岸に着いて上陸する困難は實に非常なものであつて、幾たびか海中の鬼とならんとしたが非常なる勇氣を鼓して漸やく岸に上ることが出來た、斯の如き暴風の爲に、予はゴレーに滯つてダカールへ歸ることが出來なかつた、之を以て見ても此邊の海が如何に暴れて居るかと云ふことが大概推測することが出來る、

予はゴレーとダカールとの間を往復する一の小艇を用意せしめたが、是は黑奴等が舵手となつて居る、此船には予と予が朋友と、其船の方には三人の旅客があつて二人は婦人であつた彼の婦人は太洋へ出るや否や忽ち船酔に苦しみ始めた、實に船暈者を彷彿に置く程不愉快なものはない自分迄も同病に罹るやうな心持になつて來る、夫故に予は船の方に坐を轉じた然るに此有樣を見て黑奴達は彼等の間に暴言悪口を極めて居る、或は吾々を呼んで實に憐れむべき一小白奴であるとか又吾々を水中に放擲したならば救ひ揚げる者はあるまいなど、頻りに吾々が首領を解せざるものと思ふてか、將た又吾々を黑奴する積りでか兎に角喋々した、海上に於ては予は彼に向つて一言も反駁をしない、夫故に彼は益々口を極めて雜言を吐いた、併し其驕傲は恰も吾々に言ふたのではない、吾々の間の坐談のやうな有樣を以て談じるのであつた、ダカールの岸に船が着いた時に、予は最も黑奴を極めたる一人の黑奴に向つて、今貴樣等は船中に於て如何なる事を言ふたか再ひ此處で繰返して見よと云ふたら、彼等は此言葉を聞いて非常に驚いて前して何事も言はないと抗言した、併ながら彼等は其船に在る所の仲間等と共に侮辱の言を發した故、是に於て平議論沸騰、四方より黑奴が集ま

つて來て、彼の船尖と聲を合しつゝ吾々に向つて大聲を發してやつて來た故、餘儀なく警官を招んで來て此者等を引渡す事になつた、結局彼等は數日間の拘留に處せられたと云ふことであつた、

五月十三日、予が荷物はケレックと稱する船の上に運ばせた、此船はポルドーのモレルエンロン會社の船であつて、予がカンビーに往く航海を承諾して呉れたのである、荷物其他の物を取揃へる間予は船中に居つたが、之れを終つてゴレーに往つて晩餐を喫して翌日まで滯在する者一であつた、夫故に船室で化粧などをして直に船を傳ふて乘らうと云ふ用意をして居つた、然るに海は非常に暴れて居る、小艇がケレックの傍らに到着した故、是に乘らうとしたけれども、浪が高い故に懸隔が非常に出來て飛乘ることが出來ない、可成好機會を以て乘り移らんとして待つて居た中に、乘り移る機會が來たのを見て、飛び乘らうとすると、豈圖らんや飛び損なつて水中に落ち込んだ、直に傍らに居つた者等が救ふて呉れた爲、幸ひにして水繰を知らない予も助かることが出來、再び船中に歸つたが、最早ゴレーに往く勇氣もなくなつて、此晩は船中に宿して若しも予が水中に陷つたまゝ救い人がなかつたならば、此處には非常に鮫が居ると云ふことであるから、彼等の餌食となつたであらう、然るに其難を免かれたは實に幸福と言つて宜しい、

五月十五日、前一日錨を抜ひて出帆をした、ガンビーへ到着する前より濃霧暗淡咫尺を辨じない夫故に海の深淺を探りつゝ極めて靜かに船を進めるのみである、三時頃になつて兩岸の見えるやうな處にまで進んで來た此處で水先案内が乘船した、是より水先案内をして、午後五時戒港の前に船を止めしめた、

此處はバテュルストと稱する所であつて、海岸には大樹蓊鬱として繁茂して、此邊では最も美しき港である、此樹の後方には廨店などを張つて居るものがあつて恰も巴里の市街の如き形勢をして居る此處には

八軒の大商店がある、其四軒は英吉利人に屬し、其の四軒は佛蘭西人の所有に屬してをつて、佛蘭西人は此處では殆ど三分二以上の商賣をして居る、此商賣は如何なるものを重にするかと云ふと彼の松子仁であつて、之を支拂ふ金は半は五法の金貨を以てし、半は物品を以てする、予が此邊に來た時分には此値段が騰貴した爲に、市場に騰貴が起つて、其下落するのを待つて居つた樣子であつた、

此商店で使ふ所の者は總て讀書の出來るサンルィ邊の黑奴であつて、普通の智識能力を持つて居る是等を使ふには先づ千法から千五百法の保證金を入れしめる然らざれば彼等は如何なる事をするかも知れない、遂には是等の爲に家產を盡して仕舞ふやうな事があるから、十分に用意して彼等の身躰を保證せしめなければならぬ、此處には一の大河が流れて居つて始終內地と交通することになつて居る、又好い氣候の間は是等の黑奴は歐羅巴人などの監督者の下に立つて居るけれ

ども或場合になると、歐羅巴人等は歸つて仕舞つて彼等は自身獨立の下に種々なことを所管しなければならぬのである、

著いた翌日予はモレル、ボンゴン會社の代理人ベヂヤ氏を訪問する爲に上陸した、而して此邊の何れかに宿舍を求めることを願ねる積りであつた處訪問して見ると既に予が爲に宿舍を調へられてあつた、と云ふのは昨日の中に予が此處に來る通知があつた故に、總ての準備をしたと云ふことであつた、此邊では十時に朝飯を食し二時に晩餐、六時に晩餐を喫すると云ふことになつて居る、ベヂヤ氏は予が狩獵に往くには就ては十分な便宜を與へて與れると云ふことであつた、予は稅關に至り予の荷物を檢査せざるやうに調頗した、それは、予がバチュルス滯在は暫時であつて、是より直に他に向つて往く者であるから可成關稅などを拂はないことにして貰ひたいと云ふことを懇頗した譯である、北時にベヂヤ氏も予と同行して與れて、切りに北事に辯解されたが爲、率

ひ北詐しを受けて予が荷物を引取ることが出來た、

予は直に食鳥の非常に多いと稱する驛地の近邊に於て狩獵を試みた、

パチュルスを距る三哩の所にムンゴパークと云ふ人の爲に建てられたる非常な紀念碑のあるのを見た、是れは必ず大旅行家の爲に建てられたものであると云ふことを考へたが果して此ムンゴパークと云ふ人は此處で殺されたる英吉利の士官であつて、ガンビーの黑奴が沸騰した時分の出來事であつたさうだ、此内亂の紀念と云ふ者がパチュルスに今日迄殘つて居る、河畔の黑奴の種族が此村へ侵入して來て、夫が爲に此處に駐劄して居つたる英吉利の兵隊が屠殺されて仕舞ひ英吉利の殖民地に大恐慌を來した依てパチュルスの總督よりセネガルなる佛蘭西の司令官に向つて援兵を請ふた故、直に軍隊を送つて夜中に此處へ到着した、翌日になつて黑奴達は再び此處に襲ふて來た、流し彼等は兵隊も居らず恐るべきことはないと思つて輕蔑して居つたので、

ある、處が豈圖らんや此地に到着して見ると、セネガルの兵が彼等の目の前に現はれて、殊に海より上陸したる兵隊は銃口を揃へて彼等を一擊の下に打碎かんとする眞度を眺つて居る戰爭の後で見ると彼等は微塵に打碎かれて仕舞つた是よりは黑奴も殆ど動搖しない、此戰では非常な人命を損じ英吉利の方でも澤山の士官と澤山の兵士を損じた、又佛蘭西の方で損害を蒙つたのは、三士官が是が爲に命を落した事で、併ながらパチュルスの村は此三人の佛蘭西人の爲に醵金して、修身其遺族を養つて置くことになつて居る、不幸にして予は其者を聞き得ることが出來なかつた、

五月二十二日、午前四時予はサンマリー岬に向つて出發した、此路は他く修復されて居つて海岸に沿ふたる一の眞路である此港を距ること遠からざる所に、村の稅關がある此役所は一の大きな、樹木であつて、其樹陰に役人が居つて此村へ這入つて來やうと云ふ荷物を檢査する、此

地の稅關長は立派な黑奴で、性質は溫和で人に接するに非常に親切であつた、併ながら彼等は苛酷の稅を取上げて自分等の懷中を肥すことに於ての方式を執つて居る、

予は此河を越えて而して、岬の方に進んで往つた、此岬は河の左岸に位して居つて、海面を抜くこと二百ピューの高さである、此處は以前バチエルスに居る歐羅巴人の雨を避ける土地となつて居つて大きなる商人達が雨の季節が來ると、別莊を造つて僅いて此地に雨を避けることにして居つた、此處には兵營などもあつたが一朝火災の爲に烏有に歸して仕舞つた、病院も有つたけれども、是も破壞されて仕舞つた、吾々は何もなき曠漠たる野原の中に立つたのである、是よりバチエルスへ歸つて來るのに、前來た路を通らずに、別の路をとつて黑奴の村落などを見やうとした、此邊の村落は一般にセチガル邊りよりは清潔であつて、家なども隨分高く建てられてある、家の形は四角なのもあるけれども

亦圓形なのもある、此に此邊の黑奴は農業に從事して居るが、又牧畜にも心を用ゐて居る、又此邊からしてバチエルスの住民は種々の食料を得ることになつて居る、予が此邊に來た時分には夜であつて、バチエルスに往くには河を越えなければならぬ、依て馬に乘りつゝ河中に入るも不幸にして馬は鰐魚の穴に足を踏込んだ、尖が爲に馬は將に溺死せんとした、予は馬より下りて漸く之を助け出すことが出來た、幸ひ鰐魚の害もなかつた爲に馬も予も俱に安全であつた、斯の如くして河を渡つて向岸に着かんとする時分には潮が退いて居るが爲に、馬足砂に膠して進む能はずと云ふ有樣である實に非常な困難を極めて漸く歸ることが出來たのである、

五月二十九日、此日夜に入つて、此季節に於ける第一の暴風が吹き廻つた、六時には既に警報が達して居つたから海岸に於ては總ての船をして十分に警戒せしめ、小さなる船の如きは岸へ引揚げて仕舞つた、斯の

如く十分に注意を加へたに拘はらず、二三の船は陸上に吹上げられ、又或る船の如きは轉覆して三人の黑奴は行方が知れないと云ふやうな事になつた、此風がバヂュルスに吹いて來た時は夜の事で實に思尺を辨じない、夫故に海上に艤の有つた時分にも救護などは出來ない、船の擾はれた爲に岸の方では非常に騷を張げて叫ぶものがあつた、併し幸ひにして此風は長く續かず、非常に激烈であつたけれども極く短時間にして吹き止んで仕舞つた、

六月三日、予はモレル、エプロン會社のカシヤン氏と、バヂュルスを距る四五哩の所に散歩を試みた、此處は則ち河の左岸に位して居るダクンカと稱する村である、カシヤン氏は奇麗なる別莊樣の所に遮れて往つた、是は元日曜日に遊びに來る貴族社界の待ち合ひ場であつたが、今日は斯の如く荒廢に屬して仕舞つた、此家は非常に大きなる庭園に依て取圍まれ種々なる珍奇奇木は生ひ茂げり果物は十分に實つて居る、

六月十六日、予はモレル、エプロン會社の一船に乘つてカヂャンスに往かうと云ふ考を起した、併しガンビーへ往く目的は此處で捨てなければならない、然るに此河の上流に戰ひが起つたと云ふ知せがあつた爲政府は此河を遡ることを許さぬ、且つ予が雇入れた所の人足も、此事を聞いて屈を解いて呉れろと云ふやうな事を言ひ出した、夫れ故予は直に役所に往つて此事を確めると非實であつて、役所の人々は答ふるに到底今日の有樣河を遡ることは夢想だにも出來難いと云ふことを以てした、遂に予は河を遡ることを止めて他の方面よりカヂャンスへ赴き、此内へ足を踏込まうと云ふ考を起した、此事を聞いて多くの友達は時候も遲々雨期に及んで居るし、又流行病も非常に傳播しつゝある樣樣であるからと云ふて、非常に心配された

第四章

六月十八日、予が乘りた船は、暴れたる海と闘ふたが爲に舵を折られた、之を修復して直に錨を揚げて出帆した、

六月十九日、午後三時錨をカザマンスの河口なるカラバメと稱する駐剳所の前に投じた、予は紹介狀を以つて上陸した、而して此地に駐剳する佛蘭西の代表者の家に往つたが、此人は予を非常に冷遇した、尖故に只挨拶をしたのみで直に此處を出た、而して紹介狀は引裂いて仕舞つた、寧ろ斯の如き人の手を借りるよりも、自から旅をする方が得策であると考へたが爲めである、此處の駐剳兵營は砂を以て形くられたる一の島の上に建てられてあつて、野菜などを求めることは困難である、此處には一人の少尉が四人の兵隊を引連れて居る、其他にはセネガル人の射擊隊カラバメの護衛兵が居るのみである、此駐剳所では非常に予

を懇遇して呉れて、翌日も此處に滯泊してはどうであるなどゝ言ふて呉れた、又兵卒の如きは、予が是から旅行するに就て麵麭などを用意して呉れた、

六月二十日、午前三時錨を揚げて滿潮と共に河を溯つた、サンヴロルヴと云ふ所を越えると此處に一つの村がある、棕櫚などが繁茂して遙かに見受けられた、船中より望遠鏡を以て眺むる所に依ると、此邊の人民は躰軀矮小にて殆ど衣服などは着けて居らぬ、又此地方では魚を漁ることに盡力して居つて、其方法も亦奇である、竹を捕へて一の柵樣の物を拵らえ、而して河を塞ぎとめる、退潮の時分には水が干て仕舞ふから此處へ集つた魚は手を以て容易に捕へることが出來るのである、

六月二十一日、予はセヤンチロールと稱する所に到着した、此處はカザマンスに於ける葡萄牙に屬せる最終點であつて、歐羅巴人は只一人の

佛蘭西人が居るのみである、是人は此處に來て潮湖牙人の或商店の代理者となつて居る、此村には一人の知事及びパードル（酋長の如きもの）がある、二人共麗はしき黑奴であるが其家は藁を以て作られたる惨はれなる狀の者である、さかし知事の官舍などは立派で、是等の大きなる建物の前には大砲を置いて嚴しく構へてある、此地方の者の話に依ると、此大砲は往時非常に人を殺したものであつて、斯の如き所に嚴然と構へて置くのは敵兵をして恐怖せしむる一手段であると云ふとな、

予は知事に會はうと思ふて訪問をした、然るに餘り朝早過ぎた爲、知事は化粧中であつたが、予の爲に一杯の乳を贈つて時間の長くかゝる事を謝した、間もなく、知事は現はれて來たが、性質は溫和らしく、而して林檎はなか〳〵大きい、彼が予に向つて

「知事は予にあらず、予が父は即ち知事である、しかし父は已に年老いて、人に接する如き清潔なる裝いをせぬ故、若し汝が此國を漫遊せんとするならば、余は汝に十分なる方便を與へむ、又滯留中は十分なる保護を與へむ」

斯の如く云ふて彼は市街を十分に見物さして與れた、彼、大きな事へ導ひて與れた、其後彼は此事を指して

「是は此地の大事である、此事に於て憐れなる酋長は永眠せり、今彼處を通過する黑奴は即ち新酋長なり、彼は決して參詣などをせず、殆ど禮拜心なし、加之我地の若者共は婚禮と云ふことを決してせず」

斯く言ふて、是より兵營を見物さした、然るに此兵營には僅かに一人の兵士のみしか居らなかつた、彼はそれを指して左の如く語つた

「往時は吾々も多數の兵士を有して居りしが、今は只一人の現存するのみ、若し彼れにして死せば則ち他人をして是に代はらしむるのみ、」

ピッサゴスの黑奴は長く活きる事は願はず

彼等の平日の衣服は潮湖牙の服で、奇妙なる服裝である、頭には帽子の

如きものを冠るけれども、靴などは無いと云ふて可なりである、彼は尙ほ話を繼いで曰く

「若も卿が獵に往く者があるならば、予の子息の一人をして卿の敎導とならしめん、此邊の森林は非常に禽獸に富めり」

予は此言葉に依て彼の子息なる、最も若き者と共に此處を出でた、出るや否や直に一匹のツーラコが樹より樹に飛ぶ所を打留めた、是と同時に予は一の鼠の如き所に陷つた、予が落ちると共に一疋の獸が聞えた、是は則ちアンチロップであつた、予は直に起上つて追掛けた、四時間ばかり斯の如くして、遂に予は供に離れて森々たる林の中に這入込んだ、しかし幸ひ磁石を持つて居つたから、之を檢して河の方へ進むことが出來た、予が供なる小年は予が砲聲を聞いて此處へ來て予の獲たる鳥を運んで呉れた、此河を溯つて午後二時過まで獵をしたが疲勞の餘り家に歸つた、

六月二十三日、五時頃より熱に感して、此日の夜半まで苦しんだ、殊に飲まむとする水の如きは腐敗して居つて用を爲さない、其臭ひを嗅いでも嘔吐を催す位である、水を得るに就ては非常に困んだ、予が泊つて居る所の宿舍の主人は黑奴を呼んで水を命じたけれども、此晩は暴風であつたから黑奴は往くやうな風をして其實命じた所に往かない、夾故に主人は自ら暴風を冒して水を持つて來て呉れた、斯の如くして船に乘つて再び セルヒュー と稱へる處に到着した、

此町はカザマンスの最も必要なる所である、殊に駐劄兵營は最も大きく建てられて城壁の如き物が北周圍を取卷いて居る、其他大きな樹などが茂つて居つて軍備上に就ては堅固なる形勢を爲して居る、

セルヒューは昔日の如く堅固の地でない、駐劄所の端にセネガルの會計局を認めたが、是等は總て佛蘭西人のみである、予は司令官を見舞はむ爲に出で行きしが、氏は予を過するの厚き一方ならず、尙ほ此駐劄所

の紳士の如きも亦司令官と同じく懇切にして予の爲に其寓舍を卿いて與へんとまでに言ふて呉れた併ながらモレル、ボロン會社に予の部屋は既に用意されてあつた故、予は懇切なる言葉を辭してパテュルストに往つた、

予が唯一の心配は果して內地に旅行することが出來るや否やと云ふ點である然るに友人等は予が袖を引るて內地に旅行することを承諾しない服爺は路處に起つて到底足を容るゝことは出來まいと云ふことであつた、斯の如き次第であるから、予は目的を遂することは出來ない夫故に心を決して內地に入ることが出來なければ、寧ろ此近邊に於て、予が望む所の材料を見めることにしやうと云ふ決心をした、是に於て一人の黑奴を雇つて、是と共に此近邊を獵することになつた、さて日々狩獵に出掛けることになると彼は町を離れることを望まない、二唖種も往くと、卿よ若しマンチンガ族の爲に殺されむことを望むならば

往くべし、予は此處で卿の歸來を待たむと云ふやうな事を言つて同行を諾さない、此日は斯の如くして予は目的を遂することを能はず終日逃げもせずに探險を試みた、此日マンデンガの市街の方へ近ついて來ると云ふ警報が到着した、予は獵群を認めた故に之を追かけて進むたところ、僕は忽ち予を捕へて「今マンデンガが此處に來るやうな形勢である」と叫んだ、と全時に予等を隨つる數歩の所の叢が動き出した、而して此方へ向つて馳來る物がある、夫故に予は叢の中に隱れて其姿を現はすのを見ると一の野猪であつた、予は直に銃を擬して打たんとすると、彼は予を抑めて「打ち給ふな、あれは予が主人の豚なり」と叫んだ彼が斯く言ふ間に目指す野猪は何れへか馳せ去つて仕舞ひ夜は次第に更けて來たので餘儀なく歸つて來る事になつた、

予は到底內地へ侵入することが出來ないと云ふ爲に遂に佛國へ歸らむと云ふ考を起した、是に於て再び船に乘じて歸途に就くことになつ

た、予が引連れたるはモレル、エ、プロン會社より附けて呉れた、十六歳になる一僕である、此僕は伸々綿密な男で、予に賊の狀況などを諸處より聞取つて來て詳しく話して呉れた、

六月二十八日、製水所の前に船を停めて、船を下りた、此處は一の水源地であつて海岸に位して居る、併し水源地と云ふとも僅かに此近邊の村落に供給するに足るだけの水が湧出すに過ぎない、其水たる荒くなくして且つ澄んで居る、予は村内を散策して見たが、此人民の中には非常に氣管枝傷病が多い、是れは濕し水に原因するに違ひないと考へた

六月二十九日、予が乘りし船はビエドクと云ふ處に於て圖らず岩石に衝突して損つたけれども幸ひに浸き所であつたが故に危險はなかつた、斯の如くして七月の五日迄は河上を下るばかりで、二回ばかり碇泊したこともあるけれども記すべき程のことともないし、又此間上陸などは一度もしなかつた、

七月五日、曳船が來ない爲に船を進めることが出來ない食料なども減じて居るし、又水も乏しくなつた、正午頃に予は船頭に立つた、乘客は何れも疲勞の爲に眠りを貪つて居る、忽ち予を呼ぶ聲がした、夫は「風來れり、風來れり」といふ聲であつた、此に於て吾々は北準備をするが爲に働き初めたけれども、五人の人間が不足する爲に十分に用意をすることが出來ない、北間船長は船頭に立つて命令をして居るが殆ど狂せんばかりである、幸ひに風が通過して鎮つたのは午後の二時頃である、翌日は曳船が來ることに極つた

第五章

カザマンスの河口は非常に廣いけれども、長さは五十より六十リユーに過ぎない、發源地は山中でアコリバックンと稱する所まで來ると船

の便があるけれども、是より先は船を捨て獨木舟に依らなければならぬ、此間は僅かに十八リユーに過ぎないカラバーヌよりセルヒユーに至るまでは雨の季節には二人の舵手を要するけれども晴天の時期には一人の舵手を以て足る最も危險なる所は前にも記したるビユドラである此處は水が少なきのみならず岩石が非常に多く、萬一岩石と衝突する時分には、非常なる危險に遭遇するのである、

河の左岸源よりビシヤリユと云ふ處まではマンヂング族が住して居る、ビシヤリユよりビユドラまではバルランド族の住地にして、其職域は二十五より三十リユーに擬がつて居る、ビユドラよりビヤンチヨールまでは種々なる種族の住地が散布して居る、其中の重なる物はヂチラと稱し又カラバーヌに至れる廣き村にはマンヂング族が居るが之れはセヂガンビに於ける、最も大なる種族と云ふべきものである、又右岸の方には源よりマンヂユと唱へる處までマンヂング族が住して、左

岸と同樣であるマンヂユにはバラント又はサランコレーブーヌーの住民が村を形つて居る、ブーヌーよりビユドラ迄は只一の村しかない、即ちセルヒユである、此邊には餘り樹木なども見受けない、ビユドラよりビヤンチヨールに至るまではマンヂング族、ベーメンカ及びヂチラの住民が住して居る、ビヤンチヨールより河口まではガンビー族が擴がつて居る、ホクニーにはヂチラの大族が住して居る、是等は最も大なる農民と云ふ話だ、

マンヂング族は此地に於ては最も多數の人口を有して居る此人民は商業に適し又軍人にも適する、又最も盜賊術に長けて居る、殺戮は好まないけれども、或は人家を燒き或は人を虐待する、夫故に各村には自治制度が行はれて居る、

二人の大法官があるが、是は僧侶であつて宗教上の主とも云ふべきものである、それを名けてアルマニーと云ふ、一人は軍司令官であつて主

地の刑法官である、之を名けてサルタークと稱する、而して此者に非常なる勢威を率つて尊敬して居る、彼等は爭鬪を好んで互に鬪ふけれども、殺すと云ふことはない、彼等の最も好んで携帶する武器は大きな刀であつて、之を使用するのは實に熟練して居る、其刀で受けた傷の長さは中々長いけれども、其深さは極く淺いものである、

宗教はマホメット教を信するけれども、別に其本旨を準じて居ると云ふ評ではない、妻は二人乃至四人を持つて居る、彼等は決して婚禮をすると云ふ評でなくして、先づ六十五法位の價を以て買ふのである、姦通などは屢々あつて、重き刑に處せらるゝけれども、此國には非常に行れて居る、若も其現行犯を押らへれる時には、男は鞭刑に處せられる、而して奴隷とされる、又其男のみならず其一家族を舉げて奴隷とならなければならぬ、併し婦人の方は罰しられない、マンダング族中には故らに妻を一の材料に使ふて姦通せしめて、姦夫の財產を橫奪せむとするやう

な策を執る者がある、

マンダングが若も死せし時には、アルマニーが來て最後の祈禱をする而して奇麗なる衣服を著せて非常に深く地面を堀つて葬る、男子なれば八日目に祭りを爲し、女なれば四十日目に至つて祭りをする、

ズスンカ、ガランカ、ウォイキンカはマンダング族と種類を異にして居る、同じくマホメット教を率するが、彼等はマンダングと同じく盜賊的性質を持つて居つて大酒を好む、

ハランド族は是等に比すれば勇氣ある人民であつて、鬪などをすると、人を殺戮することなど一向意に介さない、能く人の物を掠奪し、能く酒を飲む、此處に一人の王があつて生殺與奪の權以外に尙ほ徵稅其他總ての權を持つて居て、此者の許しを受けなければ婚禮などはすることが出來ない、尖故に婚禮の典を擧げんとすれば、父は王の許（贈物などをして許しを受けるような方策

を用ゆる、又許しを受ける男は豫め棕梠の酒、其他豚羊の如き物を用意して、朋友を集めて宴會を催す、而して其朋友等が畑なり或は其娘の家なり侵入して其娘を奪つて來る、兩親の承諾などは要らぬ、斯くして其人たるべき人の所に導びいて來る、是に於て新夫婦が客人に退去を命ずる迄棕梠酒を飲んで騒ぐ、翌日になつて兩方の兩親が集つて來て豚を殺して祝ふ、是に於て初めて婚禮が成立つのである、

団より一夫多妻などは許されてある、夫故に男が其妻に厭きた時分には直に暇を與れる然すれば婦人は悄然として家に歸らなければならぬ萬一男子が國王の許しを受けざる一人の娘を奪へば、直に其兩親は後より往つて其娘を探し出し、衣服を着飾らせて國王の前に出す、而して許しを受けるまでは王の彷徨に置く、然るに此間に懐妊をする時分には女は陛下の夫人となるのである、萬一人の知らざる間に婚禮などをして懐妊をするやうな事があれば、此地の貴族共が寄つてたかつて其

女と子供とを引受けなければならぬ、

國王の位は世襲であつて、國王が死すれば其子供が必ず相續する、しかし其の子供が若も二度タリスと稱する物を飲み、三杯目のタリスを飲むことが出來ない時分には國王の位に除ることが出來ない、それで今迄國王の彷徨に侍して居つたる第一の掘政役が代つて王の位に外る一たび王の位に除ると其宣告前に於て種々なる事をしなければならぬ、先づ第一に三日間親籠の中に押籠める、而して種々なる方法を以て此者を怖れしめる、或は刀を以て殺そうなどゝ種々樣々な事をして脅かす、若も是で黙くやうなことであれば、他より選ぶことになる、此者が總ての所業に黙かないならば、三日目に親籠より出して、村の中央に引出す、而して彼を地面の上へ臥かして、貴族等はそれを取捲いて、身躰の上に槍を置き服從の義務を誓ふ、其儀式が濟むと、それが若しも國王の息子であつたならば、總ての財産物件は勿論婦人まで其所有となる其

母は相續權などは更にない北國より迎出して仕舞ふ、併ながらそれが母でない時分には特に優遇することになつて居る、

前にタリスを飲むと云ふことを記したが、タリスを飲むと云ふことはカザヤンスに於ける習慣になつて居つて、是は一の大飲物である、それは此邊に隨分あるものであつて、マダカスカ邊まで傳播して居る、此タリスと云ふのはタリと云ふ樹と其葉とを以て搾る、而して製造の際人間の血と此獸の中に死んだ人の心臟及腦漿、それから肝臟などを入れて、一年間それを腐敗せしめる、而して之を大儀式の時に飲ませることになつて居る、毎年十二月になると人民等は之を飲まんが爲に、ゼキンチョールの知事にタリスを飲むことの許しを請ふて之を飲む、之を飲むには一種の稅を拂はなければならぬ、此地の行政官は其國の風習を遵奉して居つて彼等に許可を與へる、ゼキンチョールには此儀式を行ふ場所が定まつて居るから、彼等は其式場に往くと其處には一人の

魔術者が居る、彼等は此者に向つてタリスを與ふ是に於て魔術者は、先づ自身が飲んで見て、而して次第に盞の中に注ぎ込む、之を死ぬまで飲む者もあるし、飲み得ない者もある、之を飲んで死ない以上は無罪なものとしてあつて之れを飲んで死ぬ者は罪を犯して居る者と認められる、

此タリスを飲む爲に不幸なる者は一杯にして生命を殞するものもある、是等のタリスを飲みに往くと云ふのは魔術者にならむが爲に往く者が多い、又其他には他日王位に陞らんとするやうな大希望を持つて居るものである、

一黑奴があつたが、其隣人が他人の所有に屬する猥褻を三本盜んだと云ふことを告げたことがある、是いふ場合には告訴された者は盟日直にタリスを飲ませられなければならぬ、若しも飲むことを諾さない時分には其者の家財は殘らず告訴者のものになつて仕舞ふ、夫故餘邊な

く飲むことになる、毎年タリスの爲めに死ぬ者は二百に下らないで其の中の死ないものは僅に五六人に止まる、是等は決してタリスを飯んで而して死ないのではない、其實魔術者に十分の謝禮をするが爲、魔術者は彼等にタリスを飯ませる風をして內實淸ならぬ外の物を飲ませるのである、

バイエ、ヌンカ族は人口も少なく、又勇氣に乏しい、各部落に王がありて、重なる收穫は松子仁である、彼等は又獵を好み、而して宗教などは來じない、

ヂチヲーはバッスカ、サズッスと、ホンニーの二つに分れて居る、第一の方は白智人種と交通するが爲に北廻きを弱にして居る、ホンニーの方は舊習慣を守つて居る、茲に記すのは舊習慣を維持して居る所のものに就て話すのである、

ヂチヲー族は人口も多く常に隣村と干戈を事として居る彼等は性質

として穩ずべからざる所の盜賊的人種であつて牧畜の料などは澤山持つて居るし、而して其裸麥などの耕作に從事して居る、村の中央に高き塀を以て作られてある家は酋長の居る所であつて或人民が一の獸類を殺した時には、先づ第一に其頭を酋長の門口に捧げなければならない、而して其內を食べるに先つて近傍の者に振舞はなければならぬ、又毎年此村民等は一場に集つて祈禱をする、外國人は是に近寄ることが出來ない、但し近寄ると非常なる危險に遭遇する、

酋長は此村の長であるが時としては一番富裕なる者が長となる酋長は人民より非常に恐れられて居つて、人民は之を呼んで魔術者と云ふ土民が捧げる供物などの大部分は自分の物にして仕舞ふ、土民等が萬一不幸に際會して酋長の助けを請ふ時分には先づ己が所有して居る貴重なる品物を持つて行く、多く持つて行く者は牛で、其他棕榈酒、燒酎などを持つて行き、而して祈禱をして貰ふ、祈禱が濟むと酋長は其牛を

殺して其血を先祖の前に捧げて角をば其僧者に返へす、此僧個は非常に長けて居つて、僧者を惑はすには實に不思議なる程熟練して居る、

ヂヲラーに於ける婚禮はバクンと同樣である、女は常に腰にまで及ぶ所の廣く長き布を纏ふて居る、婚禮したる婦人は袂のある服を着る、男の服も富んで居る者は何かと云ふと貝殼の金を澤山持つて居る者である相だ、

萬一人が死ぬ時分には直に太鼓を打つて村中の者を呼集める其晴は遠くまで響いて家毎に報が遂ふから、何處の家で如何なる人間が死んだと云ふことが直に分る諸方より集つて來て葬禮に會するが、先づ第一死者の身體に棕個の油を塗つて、而して死者に向つて罵しる、或は「何故に吾々と共に生きて居ることを好まざるや」などゝいつて頻に之を侮辱する、而して其傍に於て千發ばかりの大砲を放つ、爽と云ふのは三日で終るので、人は出來得べきだけ泣かなければならぬ、泣男などを雇

つて來て泣せるが、此の泣男は實に一種の奇觀、吾々が聞いては抱腹絶倒に堪えない程の奇聲を發する、然る後死者に衣服を着せて又脱せる、纏て僧個が來ると死者に向つて種々な問答を始め、種々なる儀式をする、此の僧個には種々なる俄物などを捧げ、八日目に漸く儀式を終ることになる、

彼等の最も樂しむ所のものは鬪ひである、夫故に兩人の者が角力の如きことを始めると何れか死ぬまでは決して止めない、

七月六日、予は此河を下り始めた、路々糸を垂れて魚を釣り又船を下りて獵などをした、

七月七日、非常なる暴風に遭遇したけれども、此風は却て吾々の船をして一層早く進めて呉れた、

七月十三日、朝ヴレーに到着した、此日も小暴風に會したけれども、間もなく止んで仕舞つた、予が上陸する時に、予が友人達は予が此處に歸つ

て來たのを見て非常に驚いた、夫は其の筈、彼等はマレサンジの爲に予が殺されたと云ふ報を受取つて居つたからである、

七月十九日、メサグリー會社の汽船に乘つて佛國に向つて出發するとになつた、

第二卷

第一章

予が佛蘭西に滞在する間は極く短日月で亞佛利加より歸着せる以前三ケ月間であつたが、再び亞弗利加に向つて出發することになつた、巴里に居る間予は一人の好伴侶を得た、是は則ち第二の亞弗利加探險を試みるに際して非常なる勇氣と非常なる決心とを以て予と旅行を共にされたリクトル、ド、コンピエギュ氏其人である、此行を同じうする者は尚ほ此外にブーヴィエー氏があつたが、氏はガボン及びオボウエーより内地に侵入せむとする策を執つた、予等も是に同意して、萬う云ふ計畫を立てることになつた、旅行の準備は究く整ふて、千八百七十三年十月二十日に出發することになつた、

十月二十九日、ダカールに到着したが、船より下りると同時に予は一の

悲しき報告を受取つた、尖は何かといへば予が歐羅巴に向つて出立する時分からして、ガンビーの氣候が非常に猛烈になつて來て殆ど歐羅巴人の半數以上は西方亞弗利加の海岸の流行病の爲に斃れて仕舞つた一事であるが、ガンビーに於ける此流行病は黄熱と呼ばれて居るが、是は適當な名ではないと考へられる、

此流行病と同時に、マンジンゴ、カツマンスが蜂起した、黑奴等は人數の多き方に加擔する爲に走り去り、加之諸處を掠奪するやうになつて來た、尖れ故セルヒュなどの市街の近傍は樹木などの總てを伐り拂つて可成敵を寄附けないやうにした、ゴレーの司令官なるカナール氏は巡洋砲艦アルヤメードを遣つて其士官及び水兵をして、砲銃を持たしめて此地方に商人等の平穏に生活し得らるゝやうにせしめた、

予はダカールには三日間しか滯留しなかつた、尖れよりリユフエスクに至り、予が友人なるタロッフルと云ふ人の家に宿ることになつた、此

地に着するや否や、博物學上の研究を始めた、予が以前此處に滯留した時分には、更に見る處もなき荒に荒土の地と考へて居つたが今日來て見ると其時候になつた爲か植物は著く繁茂して何となく眼やかに見えた、是等は予が材料を蒐集するに最も適當な場所である而も諸處に裸麥や松子仁などが、一尖先も見えない位に繁り合つて居る、尖が爲に一たび鳥などを打つても、之を探すのに大困難である、予は前の旅行に於てはメル、メタリックと稱する鳥を獲ることが少なかつたのを遺憾に思ふて居つたが、今度來て見ると大變多く居つて樹は殆ど此の鳥を以て掩はれて居る位である、此の鳥は貴重な鳥で其羽毛などは、人が喜んで珍重するので、此鳥を一羽捕へれば幾回と云ふ高價に賣ることが出來る、

十一月十三日、ゴレーに歸着した、是れよりダカールに向つて往つたが、畏友なるコンビエヤユ氏は十九日着の汽船で此地へ到着するとにな

つて居つた、

十一月十九日朝船が入港する信號があつた船の碇泊すると同時に、予は小艇に乘つて其船まで往つた、コンビニキュ氏は船中より海岸の景色を嘆賞して止まない、カナール司令官も此處へ來られてゴレー及びダカールの風景を說かれた、

吾々は直にケークールの家に宿舍を定めた、予が此處に到着した時にレチンラグレーズと云ふ人に遭遇したが、此人は予が歐羅巴に歸つた後間もなく此地に來られた博物學者である、同じ學問を研究することであるから忽ち懇意になつた、此人と屢々ダカールの近邊に獵を試みた、

十一月二十三日、港務局長なる一老人が予の物らに來て今日レヂルの船で虎狩をする目的を以て來た四人の者があると首ひつゝ、人名簿を示した、之を一見して其四人の姓名と其の職業が虎狩であるといふこ

とを確め得た、

是等の人は實に氣の毒なる者を以て居る者で、此地へ來て虎狩をしやうと云ふも決して虎を得るとは出來ないのである、殊に彼等の財嚢は極めて輕い、虎を獲ては夫れを賣つた金を以て旅行するやうな者であつたのみかゝメルに於ては檢疫の爲八日間船を停められて、夫れが爲に大層金を費やして、今日は殆ど無一物になつて居るのである、夫れ故此處に來て、虎などを獵することは到底覺束ないから、彼等は遁退に別して仕舞つた、歸らん乎、旅費の盡き果てしを如何せん、留まらん乎、目的とする虎の居らない土地なるを如何せん、彼等は實に乞食にでもなるかと云ふやうな悲れ悲然の姿になつて居た併しながら彼等の携へし所の獵銃の如きは輕くして且つ完全で實に立派なものであつた故、會社長に嘆願して其銃を抵當となし、船賃は歸着の上に拂ふことゝして漸く其船に乘つて歸ることゝなつた、是等は實に氣の毒な話であ

る、

リユフヒスクに至り吾々はヤコッフル氏の家に兩三日滯留して、メルメドリックの狼に往つたが、十二月十日アルキメード號に投じダカールを立去つた、是は軍艦の事であるから、是に乘組む事はむづかしいのである、殊にダカールの役所では此船に乘込むだけに、一人百法を拂はしめた、而して食料などは自ら携帶しなければならぬ、幸ひにアルキメードの船長ロベール氏、及び副長ダニエル氏の厚意によつて便宜を得たのみならず、我々を食事に招んで車を同じうされた、又士官達から招待を受けて、彼等と卓を同じうすることが出來た、斯の如くして四日の間愉快に日を過し、また旅行することをも得た、

十二月十四日、バンチーに到着した、此地はコンゴレー河口であつて、此の河はシュラレオンと稱する六十ミルス餘の處より流れて來て海に注ぐのである、此國の黑奴逃は戰爭の爲に疲弊して佛蘭西に降參して仕

錄つた、此處にはカウバーヌに於ける如く駐營所があるバンチーに到着すると、既に我々が此地に來ると云ふことが分つて居つたものと見えて路傍に立つて我々の來るのを見て居るやうである彼等はカナール司令官が檢閲にでも來るものと考へたやうに見受けたのか我々は兵隊などが出て居つたが爲に軍令を以て歡迎された樣子である、此駐營所は一人の軍曹と、二人の水兵と其他セネガルの射擊隊二十人とを以て形ちづくられて居る、此駐營所司令官なるセーヤック氏は當時留守中であつたが、吾々が來たと云ふことを聞いて、他處から歸られて直に船に來て佛蘭西の形況などを問はれた、上陸する時分に我々を伴ふて夫人に紹介などをされた、其夫人は若く奇麗な人であつて、斯の如き僻地に居られる勇氣には感服した、夜の一時過まで同氏等と快談を催ふした、

十二月十六日、アルキメード號の諸友に別を告げて、小艇に乘つてシュ

ウレチメまで往き此處よりガンボンに至る小艇に乘り移らんと決した、

十二月十九日泥酔せる黑奴等の一小艇に乘じて翌日午後九時頃シエラレチメに到着した、其夜は船に明して翌日上陸し直に公使の許を訪ねた此人は此地の大商人モレル氏に紹介して與れた、モレル氏が予を遇するの懇篤なる只之を賞するの外はない、

シエラレチメは亞弗利加西部の英吉利領地の主府で高丘の上に位し海岸には海に面して白堊人種が住つて居る、諸處に大きなる建物又は寺院などがあつて、歐羅巴の市街の如き形勢をして居る街の西部に黑奴が住つて居つて、種々なる商賣をして居る、是等はセネガルの黑奴等の家が多くして、汚穢を極めて居る、此地の一方の高き處には知事の邸を眺め又一方には兵營を眺めるが、其兵營には離れ一人居らぬ、此地は往時盛んであつて、人口も多く殊に白堊人種の數も尠からずして隨分

愉快極つた生活をしたやうであつたが、今日は遠く其跡を見ない盛し傳染病が非常に流行した爲に、兵隊の如きも印度の方に向つて送られて仕舞つたやうである、其他商人の多くも他に移住して今日は只僅かに黑奴が唯古き馬車を見て昔日の隆盛を追想するに過ぎん、

十二月二十八日、アフリカ號と稱する船に乘じてシエラレオネを出發してガボンに向つた、モレルと稱する人は我々を船まで送つて來られて其に親友となられた、併なから不幸にして三週間の後に不歸の客となつた相である、船の上には二人の英吉利流軍士官と其予が乘つて居て是等の人と深く交際をする事になつた予等の如きは中央亞弗利加に遠征を試むる心算であるけれども、彼の二人は予より尚一層の困難を使すらしい、彼等は運搬夫とか或は獵師などを數多引連れて居つて種々なる物品などを持つて居つた併なから彼等の氣の毒な事は、コンゴに至つてから引連れた者等の抵抗を受けて目的の地に往くこと

を嘗んじない爲に、彼等は引返さなければならぬことになつた、

コンゴを出發してセンゾビヤと稱する所に到着した、是はリベリヤと云ふ黑奴の國の首府である、此國の人民には一の奇なる法律がある、其法律は何かと云へば「何事も錢無きが故に服從せず、借金は拂はず」と云ふ亞米利加合衆國のいひ掟である、實に驚き入つたる國と言はなければならぬ、

十二月三十日、バルム岬に來た、此處には一の砲臺があつて、二三の兵士が居る、此邊は航前船では走ることは出來ぬ、是非共蒸滊船の力を借りなければならぬのである、

千八百七十四年一月一日、コートドール（金岸）の英吉利の殖民地なるゴードコーストに到着した、此時恰もアキヤンチスに對する戰鬪準備をして居る時であつた、

一月四日、ダホメーの一都なるヴィダに到着したヴィダは最も佛蘭西人の多く住んで居る地である

第二章

我々はボニー河口に進んだが霧の爲に進むことが出來ない、遂に此處に碇泊することになつた、ボニーは水上に浮んで居る市街で、此市街は二十餘の老船より成立つて居る是等は總て古き船、又は砲船などを使用したのである、我々は此處に二日間滯在しなければならぬ爲に其間上陸を試みた、而してグランヂー氏や其の友と共に旅中の淋さを紛さめん爲に船歌の聲の裏に出發した、此散策の目的は、此邊の市街を見るのと、而して天然的の彈林等を觀んが爲めである、

岸の上には特に記すべき興味はなかつた、其中で森は多少の奇觀を具へて居るけれども、是とて記す程の必要はないと考へる、是等の森を見てから此邊の森林を狩くらしつゝ一層内地に進んだ、而して彼のホヴ

キンスの力に依て成功した、ニヴェル河に赴く運河的工事などを視たところ既に日は暮れて村には宿るべき家も見えない爲に餘儀なく船中に一夜を明すことになつた、各自船の一隅に横臥しつゝ眠を貪つた、然るに蚊軍の襲撃が太だ猛烈で到底快よき眠を貪ることは出來ない、夜の明るまで斯の如き躰蚊であつた、

翌日も我々は夕飯を喫せむが爲に上陸した、其料理店はオーストラリヤンと稱する老軍艦の上に在つて一のホテルの体裁をなして居る、實に此市街の景色は奇である、則ち前にも言ふ如く、總て此市街は老軍艦の上に立られたので、此軍艦の中には眺望上妙なる船室を放つて居るものもあるし、其他また一種奇異なる名などを持つて居るものもある、此料理店は非常に便利であつて又た景色も宜い、空氣なども陸上に比ずれば新鮮で食物も美味く食させることが出來る、軍艦を割き分した故に、其上には大きな板を以て掩はれて居る、其後方は歐羅巴人の住家になつて居つて眞正なる家を形つくつて居る、而して英吉利人の如きは中々驕奢を極めて居る、其他の家は商店で、或は食糧品を賣るとか、歐羅巴の物品を賣るとか、云ふやうな風である、其他は棕櫚の油とか、貿易品とか、又は反物、又は金銀細工の腕輪、又は白粉などを賣る店が澤山見へる、予がベニーから船に歸る時分に彼の有名なる旅行者の弟たるファーレス、リービングストンを同道して歸つて來たが、惜むべし此人は三ヶ月以後に黄熱病に惱つて斃れて仕舞つた、

一月十日、夜に入つて、別來頻りに疎ねたツイユカラバールに到着した、此地は低き所で見る物などはない、僅かに一本の棕櫚の樹が最も寂し氣に立つて居るのみで肥事と爲すべき材料は洵に少ない、

ツイユルカラバールも亦ホニーの如く老軍艦の上に立てられた一の市街である、吾々はユルクと稱する矢張り老軍艦の上に造られた、獨逸人の商店に入つた、恰も此時は他の船が到着した時分であつて、吾々は

一方ならぬ歡待を受けた、此老狐狸は予が今迄見た中では最も洗脚なもので、此船の中には宏大なる客室などが造られてあつて、吾々の爲に英吉利人等が集つて宴會を張つて呉れた、其宴會は夜の一時頃まで續いた、吾々は幸ひにポヒニンスの周旋に依て一室を借受け翌朝まで眠ることが出來た、

翌日午前五時ポヒニンス及びグランヂー氏等と狩獵を試みた、吾々が到着した村に於ては、一種異樣なる祭典の最中であつて男共は外出を禁じられ、一の箱の如きものゝ中に閉ぢ籠められて居る者も是から出たならば鞭を以て鞭たれるのである、女共は狂せんばかりに踊つて居て、若きも老いたるも一緒になつて實に見るに堪えざる風をして騷いで居る、吾々は之を見て此處を横ぎらんとした所が、彼の女共は一直線になつて吾々に尾して來る、併ながら靈にして尾いて來るのを止めて仕舞つた、

此處を出ると一の小川があるが、此處は魚を漁るに適して居るとの事である、其の捕方は一の趾網を以て魚を拾ふのであつて、予が次ッンビエヤユ氏の如きは趾網を掉れば必らず捕へることが出來るだらうと考てそれに手を觸れた所、果して小さなる魚が獲れた、此魚は鮒の一種に屬して居るものであつて、小さな甘鯛位な大きさである、

翌日吾々はフォルナンドポーに向つて出立して、二十四時間内に目的地に到着した、此島は非常に豐饒らしくあるが、商業などは昔日に比して衰へて居る、併し此地勢は最も好良である、殊に時間も僅かなことであるし天候不穩であつたから上陸することが出來なかつた、此市街は赤色も好く、最も此町の特色を存して居るのは郊外であると云ふことである、其處には大きな町があつて、水夫の遊び場所になつて居る、夫故に賭博場とか、或は飲酒店などが軒を連ねてある、

此地に到着した時、一の面白き新事實を發見した、博物學者は此地に猿

の種類が多いと云ふことを示したが、實際は此地に居るのでない、是等は總て其近邊より持つて來るので、此地に產するのでないと云ふ珍らしい事が始めて分つた、

一月十五日、午後一時クーレンス灣を出立した、煙霧朦々であつたが風が吹き拂つて仕舞つた故、四時になつた比、ヒエルナントスの岬を明瞭に見ることが出來た、

一月十六日、午前六時ロリスコ島を望み、午後二時にガボンに到着して港口に碇泊した、

第三章

千八百三十四年より千八百四十三年に至る間、彼の內地探險權と黑奴使用問題とが、亞弗利加の部分に於て非常なる注意を惹起したとき、ロー、ロ、ド、ランゲル及びブエーヴゥロー、メ兩將軍はガボン河口の事

に就て十分に研究され、而して此地に佛國の領地を得ることを準備され、第一の條約は此左岸の最も有力なる酋長グニーの王と締結された、此人は最も我が佛蘭西人に向つては厚意を持たれて、或は商業上の利益にしろ、或は海軍上の利益にしろ、其他船舶の漂泊沈沒等の事にしろ、汲々として我が爲を思ふて呉れた人である、政府はグニー氏の爲めに謝意を表せんとして勳章までも送つて居る、此條約が締結されてから、遂に右岸の酋長等と共に相談をして、佛蘭西の主權と云ふものが次第に各地の人民より認められる樣になり、千八百八十二年に至りてはローペー岬まで敷衍するやうになつた、此ガボン河口は大きなる港灣を爲して、亞弗利加西部の海岸では第一の良港である、此港灣に注ぐ所の水はコモ及びクンボエの二つで、灣內に入るには極めて容易く噸數の多い船で造作なく入ることが出來る、灣の入口に至ればブエー山を望み得る、此山は殖民地創立者の紀念として其名を附けた者で、此地方の高き

山である此山の前の潺々としたる森の中に赤き煉化の家が聳えて居る、是が即ちカトリックの島である、之を距て遠からざる所に、二つの四角形の家があるが是は病院である、是より遙か奥に多數の家がある、又河口の左の方には國王ダニーの町がある、北他ベロッタ島、コニッタ島などが散處に點綴して、コンゴ及ランボエの河の入口を劃して居る、港の前には軍艦が三艘碇泊して居る、二艘は此地を護衛する爲に候遣された砲艦で他の一はコルドリエールと呼ばれたる、今日では戰艦として用ゐられて居る老軍艦である、

此地は不健康であるが爲に、政府は殖民地の行政事務に屬する士官又は文官等の役人が到着日中は線地に居ることが出來ないと思ふが故に、此軍艦中で仕事をすることになつて居る、吾々は則ち第一に望んだ目的地に到着したのである、

此コルドリエル號を訪問した時に諸友人等は吾々を懇遇して呉れた、

のみならず、家の見得るまでは此處に宿泊することを許して呉れた、夫故に此旅行中に於て吾々がボンヘ歸つて來て後或は疲勞の極或は病氣の時などには毎も此船中で手厚き待遇を受けたことを特筆せしむる殊にガドンの司令官がルロー、マクシー、ルクラン及びヒュッロー、海軍大尉某の諸氏に對しては特に感謝の意を表するのである、ガルロー氏は吾々の爲めに、是より旅行せんとする地方に於て感情を密くに足る種々の報告、又は材料などを供給して又物質的慈義的に一方ならぬ注意をして呉れた、それのみならず河畔に一家を造つて呉れて、毎日吾々の荷物、又食料品などを運搬して呉れた、惜しかし吾々は一日も猶豫せずして、内地探險の途に上らうと云ふ爲に非常に急いだ、然るに此地の氣候と云ふものに關して戰慄しなければならないことになつて來た、

一般に此地方の氣候に就ては報告が間違つて居る、決して酷熱である

が爲に死者の數を多くすると云ふのではない、寒暖計は日陰に於て列氏三十二度より昇らない、それが最も熱い時節である、即ち一月二月三月四月五月である、朝が二十五度、午後二時が三十一度より三十二度、夜は二十六度より二十八度の間を昇降する、其他の月は二十二度より降ることはないが、二十八度より昇ることもない、尤も冷しい時に依て違ひはあるけれども大差はない、一般に年を二つに分つて雨の時節と乾燥せる時節と云ふことにして是等を又幾つもの季節に分けるが大なる乾燥季節には、三ヶ月間は雨と云ふものを見ない、小なる乾燥季節には六週間から二ヶ月間位雨が降らない併ながら雨の季節になつて來ると七ヶ月間連續して其四分の一は洪水が服つて居る、

ガボン河口に居る所の重なる種族は、第一にガボン人、又はムボンゴエ、プール、バカレー、バウァン又はムクン等で、總て歴史上なり、人種學上などから較べて見ると、多少此間に差別があるけれども、先づ一般にムツ

ウン人種である、此種族は別は躰軀大にして平均して居る、容貌なども規則正く、鼻は大きくたく、脣は厚くない、而してガボン又は隊細巴人などの許に來て多くは僕妾の役に服して居る、プールは此國の最も發達しない人種で多く森林中に隱れて居るが故に、ガボン人は彼等を卑下して居る、バカレー、アクカライはコゴ川の對岸到る所に見受ける人種で、最も商業的且つ好獵的人種である、バウァンは內地に深くまで入込んで居る人民で、居も勇氣ある、最も好獵的人種である、而して次第に海岸の方へ繁殖して來るやうな傾を以て居る、中には此人種が怖るべき力を持つやうになると云ふ考を有て居る者もあるが實に其の通りで今日の有樣に依ると殆ど破壞に近いて居ると言ふて宜い、彼等には增長的性質が殖えて來て怠惰と云ふことは彼等の天性となつて來るやうな傾きを有て居る、

ガボンの黑奴は己の食料に適するものより外耕作せぬ、其の種類は芋

蕪、甘藷、松子仁、裸麥等である、砂糖は一の驕奢物としてあるのみである、又家畜の如きは僅かに山羊、綿羊、鷄及び少しの豚があるのみで、又多少牛をば使用して居る此がポンに就ての收穫は他日商業の事に就て話すことがあるだらうと思ふ、

一月十九日、コルドリエル號の士官等と狩獵に出掛けた、二三の黑奴を路案内とし、其他料理人と犬とを連れアンチロップを獵しやうと云ふ目的の下に原野を通つて森林中に入つた此地は最も狩獵に適して居ると云ふことである、一行中の者はヌシエリと稱する處にてアンチロップを獵せむが爲に進んだ殆ど一時間餘も待合せる間に一發の砲聲が聞えて、之と同時に異樣なる叫び聲が起つた、是ぞ則ち軍々一行中の者がアンチロップを認めて打損つたので犬をして猛々勇氣を振はせんが爲に、斯の如き聲を揚げたのであつた、次第に人聲犬鳴は遠ざかり殆ど毫々が耳朶を打たなくなつた、吾々は此處で晩餐を喫したが獵師達は夜になつて、歸つて來た僅に一疋のアンチロップを持つて來たが之を獲る爲に非常に遠い所まで走いたといふ事である、

一月二十六日、吾々はガポンの北方なるクインクルと云ふ處に在る平原に狩獵を試みんとして、其處に一の小屋を建てる爲に出立した、獵師などを引連れて進んで往つたが其黑奴中に一人の婦者があつて、多量の燒酎を飲んだが爲に亂暴狼跡を極めて一行の進みも是が爲に遲延した、

午前九時頃に一村に到着した、此處に一の小屋を建てんとして酋長らしき者に相談した處、彼等は先づ第一に何か飲料を與へよと云ふことを請ふた、依つて使丁をして第一の荷物を開かしめ、大きなコップに葡萄酒を酌いで與へた、すると彼は一口飲んで異樣な顏をなしつゝ其の妻に渡し、夫から其席に連なつた者等は各々一口づゝ飲みまはして噴飯に堪へざる一種異樣の顏色をした、予が一同に彼等の挙度などには、閑

保せすして此地を出立することになつたが其酋長は吾々の使丁の一人に向うて、吾々は白皙人種を厚遇した積りであつたのに何故斯の如き悪臭ある物を飲ませたのやら、サッパリ其理由を解することが出来ないと言ふたさうだ、我々は此の話しを聞た故、彼に與へた第二の葡萄酒の瓶を戻せと云ふことを命じた所、彼等は中の酒をば飲んで仕舞つて瓶ばかり返してよこした、依つて其殘つて居る酒を檢すると是はしまつた、葡萄酒ではなくして白い酢であつた、彼等が非常な顏をしたのも決して無理のない話である、依つて予は改めて他の本當の酒を更に與へて初めて彼等をして安心させた、

翌日より諸所を狩くらした、此邊の平原は廣く且つ美にして、大樹は烟が上に繁り、小樹は此間を點綴して居て、如何にも倉卒が多いやうに考へられる、然るに數隅らんや非想像とは相反して餘り多く居ない、僅かにコンビッヤ氏の足下より出でし一疋のアンチロップを見たのみ

で、おまけに氏の銃丸の鳥を打つ丸を送てあつた爲に二羽ばかり打つたけれども遂に之を打ち止めることが出來ずに了つた、

併し意外の獲物は此獲の中に於て見出した、ブールー人の三個の骸骨であつた、密に之を拾ふて直に荷物の底に入れ黑奴等の眼に着ないやうにした、全体彼等は吾々が人間の殘骸を拾つたのを見ると、非常なる危險を與へるので彼等は如何なる事を我等にするかも知れないからである、ブーピエー氏も亦た白皙人種の婦人の骸骨を拾ふた、先年或黑奴が眼羅巴人の墓を發いて、其腦漿を奪つたと云ふことで、遂に其因行者を捕へることが出來なかつたといふ話であるが、或ひは之が其の殘骸であるかも知れぬ、全体かホン人は非常な迷信家で白皙婦人の腦は幸福を祈るについて最も効驗が著しいと信じて居る、

是より後數日後ゃゾルフ氏は吾々に使者を送つて、誘ふに散策を以てした、而して吾々を導いてやらうと云ふ筒き青藥をもたらした吾々兩

人は數月來大熱を發して橫臥して居つたが、二人の中で何れか此招待に應じやうと云ふて相談した所、コンビエヤユ氏は到底床を離れることは出來ぬといふ所から、それで予一人病を冒して招きに應ずることになつた、十時にツオットー岬に往つた所、其處にはキゾルフ氏等が待つて居られた、此邊の村の酋長共が來るのを待つて歓迎を試みたが、時に席に著かんとした時予は眩暈を發して、只僅かに司令官に向つて、大變氣分が惡いと云ふ一言を發したのみで、其處に倒れて仕舞つた、キゾルフ氏は之を見て痛く驚いた相だが、此地方の事情を知つて居る爲介抱に手を盡されて、予が寢まで連れて來てくれた、所がコンビエヤユ氏は予より一層苦悶の体であつた、ルジョン氏は予を病院に入れて貴れたが、漸く二月二十二日に至つて出院することが出來た、併尼尊の慰切なる介抱に依て、朝夕スープ又は新しき鷄卵などを食し、次第に健全なる身体になつて三週間ばかりの後には元の健康に服したが併しも

た内地に向つて出立するだけの勇氣はない、

キゾルフ氏はマラブー號に乘つてアエナンクーと云ふ處に、一ケ月間滯在の見込で出立することになつた、夫故予を引連れて往くと云ふことを聞はれた爲め、吾々は悦んで其意に應じた、第一此旅行は吾々の研究上に最も適して居る地方であるし、獵などにも適して居るし、且つ博物學上の材料を蒐集するに最も價値ある旅行である、それのみならず吾々が是より探險しやうと思ふ河口に位して居る地である

フエルナンクーはオグエー河の支流の上に在る一の大なる地であつて、此河口にカーと稱する國がある、其處には曾つてシュレヤユー氏が旅行して、其地は爲めに天下に顯くまでになつた所である、此河は海と交通することが出來るが、其間は中々危險で通路は非常に狹い、此處を初めて通つたのはピオニエと稱する船で今日でも紀念の爲に其名が附いて居る、

三月一日、吾々はアルナンツーに到着して稅關の前に碇泊した、所が予は再び熱病に罹つて終日此船の上に居らなければならない事になつた、まかし幸ひにしてコンビエキユ氏は無病であつて獵などに往くことが出來た、彼は歸つて來ては獵の結果等を報告したが其中で最も面白く聞かれたのは犀の獵である、此獸は皮が厚くて、到底鉛丸が貫らないのみならず同行者も彼が餌食になりかゝつたやうな危險千萬の事に遭遇したと云ふ話抑であつた、

三月三十日、此近村に於て戰爭が起つたと云ふ報告を得た、老若男女の、難を避けて此地に來る者が數多ある、軍さは餘程激烈なやうな鹽梅で加之負傷者は船に來て切に我々に療治などを請ふやうなことがあつたが、其負傷者中には左の手を一刀の下に斷切れた者などもある、まかし之を療治するのには器械もなく、又適當なる藥品などが用意してない、己を得ず彼等に此國の方法を以て療治することを命じたものゝ到

底吾々の療治を以て適すことは困難であるされど黑奴は一般に體格が强壯である爲に、自然に快癒に赴くと云ふやうな風であつた其快癒に赴くのも白哲人種に較べて經過の宜しかつたのは意想外である、

四月六日、ボンに再び戻つて來た、暫らく休息した後吾々は十七日に此近邊の內地に遊入つて獵を試みむ爲に出發した、

吾々は實に不整頓なる小船に乘じて出發した、船員なども不足であつたが第一日にはツオエント岬に進むことが出來、第二日には大困難を冒して漸くイダメー河に到着した、此時は既に日沒後であつた此間に遭遇したものは黑奴の乘れる獨木船位のもので彼等は予が船を見るや奇妙なる聲を發しつゝ武器を執つて戰鬪の準備を始めた、實際彼等は白哲人種などを見た事がない、是等の者は最も敢愾心に富んで居るものであるから、斯の如く非常な準備に取かゝるのである、予が乘りし船の能手等は彼等に對して、決して危險なものでないと云ふことを叫

んだ。闘うすると彼等は船を我が船の傍らに着けて暫らく何か談合つて居つたが、遂に立去てしまつた。吾々が路を繼けてバウァンと云ふ小さな村に着いた時分には彼等は大に予々を優遇した。此邊は盜賊を以て充たされて居る國であるから、上陸して居る間は吾々の中一人は如何にしても船に殘つて居なければならぬ。予が即ち番人の役目に中つて、コンビエヤユ氏のみ出て行かれたが、此位不愉快な晩はなかつた。

コンビエヤユ氏が其夜此村の酋長に小量の酒と鶏とを與へた爲、翌朝酋長は其返禮の爲に吾々の所に尋ねて來た。彼はまた一の鶏を持つて來て

『汝も予が爲に鶏を贈つた。故に予も亦汝に鶏を贈るのである。予は汝の友たらんことを望む』

と云ふ事を言ふた。

午前一時頃喇叭の聲は劇喧として起つた、それはアンダの到着したるを知らせる喇叭であつた、此アンダと云ふ者はグニー王の酋奴隷の息子で、彼が性は最も冷刻に、最も勇悍に、此人種の中には珍らしい男である、獨木舟を構造することに就ては最も熟練して居る、又ガボン第一の狩獵者である、吾々は直に此者を訪れたが、彼が言ふのには、此村は最も禽獸に富んで居る故吾々の爲十分助力しやうと云ふ事を言ふた、其家に吾々が往つた時分には吾々を新築の家に導ひて大層厚遇して呉れた、

其晩は種々なる用意をして翌日愈よ大狩獵に着手したが、實に其愉快なることは筆紙の及ぶ處でない、毎日猪やアンチロップの群、其他森林に棲息する種々の禽鳥を獵する、予が博物學研究の材料として最も貴きは手足の長き猿(Colofus satanas)で體軀は一米突四十餘、赤き絶ある毛でつゝまれて居る、又禽鳥の方では鷲、其他珠鷄等の獲物があつた、家に

歸るや否や之を保存する策に取りかゝつたが此邊は氣候が熱い爲に保存などは思ひもよらない、又剝製にすることも隨分難い、加之其仕事をする困難は夜間は蚊が多く、晝間は蚊の如き小さな虫が飛んで來て、手足や面部を刺す、夫故に木を燃して其煙の中で夫等の物を調理するのである、

四月二十六日、予が手は非常に腫れて何事も爲ることが出來ない樣になつた、殊に數日以前より病の爲に身軀を動かすことも出來ぬ、コンビニヤユ氏も亦倒れて仕舞つて氣息奄々として居るやうな風であるから、已むなくブットーへ歸ることに決した、予は歩行が出來ない爲、ブンダは木を伐つて椅子の如き物を組ませ、四人の男をして擔がせたが、是等の人間は擔ぐことにかけては極つて不熟練で、乘つて居るのは實に以て不愉快である、殊に道路は泥濘脛を沒するといふ有樣故其の動搖は太甚しい、夫故に此上に乘つて居つて身軀の平均をとらなければな

らぬ、爲に身体に大疲勞を覺え、一身凝て綿の如くになつて漂く獨木舟のある所まで着いた、而して舟の中に倒れて仕舞つた、

此河を下る時分に近傍の人民等は、吾々を見物しやうと云ふので河岸に群集した、此邊の景色は實に絶景で少し高き所にて婦人や子供等が奇妙な顏をして眺めて居る、此地を距る遠からざる所に一の島がある、是はバウアン族が死人を葬る處である、吾々は此島に昇つて十分人類學上の研究をしたいと思つたけれども、ブンダはそれを抑めて、一所の如き事は群集の前ではせぬ方が宜しい、若も此島に在る骨などが欲ければ、予が貴下の爲めに持つて來てやらうと云ふことであつた、此邊では約束などを遂へることは當然の如くなつて居るが、予は此ブンダを信ずるが爲に、終に北の言に從がつて、其島に上陸することを止めた、

此邊は最も獵に適して居る地で、予の如きは木の下に坐つて居つて、無數の鳥を得ることが出來た、斯の如くして河を次第に下つて、ガボンへ

到着した時分には、獨木舟に居る黑奴達が、我々の影を見て逃走する狀といつたら、恰も猫の鼠を傳ふ如くである、恐らくは吾々が如何なる事をするかと云ふことを怖れていあらう、又我々を十分に認めて危險でないと云ふことを知つた時分には我々の彷ちに來て、ホーロ、グンガボンに着き、再びルクワン氏の治狀を受けることになつた、

第四章

六月三日、ウオカー氏の支配に屬するハットン、コクソン會社の小蒸汽船に乘じてガボンを出立した、オゴウエー河を溯つてアダンリサンクンゴに往くのであるが、此地はオゴウエー河の支流と、ヌグニエ河との相會する所で歐羅巴人の運送會社が二つ三つ見へる、又ヌグニエ河は南部より流れて來る最も必要なる河である、ウオカー氏は吾々に乘船

勞を惜まれしのみならず、必要物品などを廉價に讓つて與れた、此オゴウェー河が世人より注意を惹いた原因は、ヴェシャヌー氏で、此人は餘り內地へ深入はしなかつたが、此の地は最も將來に必要な地であると云ふことを十分に說かれた、夫故に先づ第一に此河を溯つたは歐羅巴人カルバル氏である、此人は海軍の士官でガボンより出立し、ガボン河を離り森林を越えてオゴウェーに到着した、此人の後は海軍大尉のエーメー氏で、此の人はビオニエ號の乘組員で、フェルナンターを發見した人である、此の人は二度目の旅行にオゴウェー河を溯つてメグニエ河の會する所まで溯つた、此旅行はオゴウェーの諸說に商榷上の勢力を得ることに就ては最も必要なるものであつたが、是と同時にウオカー氏は陸地より此地へ來た、而して第一の旅行に於て生擒となつて六ケ月間も此地に居つたのである、氏が所持せる物品などは殘らず奪ひ取られて仕舞つた、ウオカー氏は事々が旅行する時分に其にロベー

と稱する所まで來られたが、此地には最も緊要なる市場がある、オゴウェー河は數條の河を集めて海に注ぐのであるが、其中重なるはワンゴと稱する河でファルナンターに於てオゴウェーに注ぐ、もう一つはナヅレーと稱する河で兩河の會する所は殆ど八十ミルの廣さで、其中央にロベー岬がある、六月四日、三角形をなせる河洲の入口に位せるロンベと云ふ島に到着した、此地よりオゴウェーに行のである、此島にはウオカー氏が倉庫を建て居る、此地に來た時に、下オゴウェーの酋長共が予を訪問した、夫は予が目的は如何なる事であるかと云ふことを探る爲であつた、初の中は吾々が內地に深入りすることを大に拒んだけれども、我々がガボンの問令官の朋友でもあるし、十分に武器などをも用意して居るのを見て、之を遮ることが出來ない、爲めに彼等は餘儀なく承諾の意を表した、

六月六日、河を溯り始めた、オゴッエー河口に散在して居る小島を廻つて、滿潮と共に他の河へ進入つた、此邊は實に不愉快なる景色で殆ど目をとめる物はない、しかし進むに從つて景色も佳くなつて來るし、河幅も增して來る、ジャゴ村の前に往つた時には千二百米突位の廣さになつて來た、此地を過ぎて間もなくカロアーに到着した、此處には棉花の樹などもあるし、又綿の產地であつて其綿の樹は二十五米突より三十米突の高さにまで茂つて居る、此綿の花の咲いた時分には實に得もいはれぬ美色で眼界一白恰も雪が積つて居るやうださうだ、此邊は河幅も僅に百米突位の廣さで土人等は滿潮の時魚を漁る事を彼等の財源となして居る、

夜に入つてから或村の前に船を繫いで上陸した、するとコミー又はカロアーの種族がやつて來て頻りに吾々の身邊を取捲いて、何故此地へ來たかなどゝ問ひかける、吾々は商業などの爲に來たのでなく、只此國

の風俗山川を觀、且つ狩獵せんが爲に來たと云ふことを以て答へた所、彼等は一方ならず驚いた、此日獨木舟に乘つた二三の黑奴が吾々の前に來て芭蕉の實、或は雞頭などを吾々に贈つた、又一の船には魚を滿載して居つた、子は此魚を見て博物學上の參考として利益を得た、是等の黑奴は獨木舟を繰るには餘程熟練したものである、

運送會社の有る所に到着した、此處にはシンクレールと呼ぶスコットランド人が居つて吾々を歡待した、其人の家に進入ると同時に驅幹の肥大なる眼光の爍々たる一人の黑奴が二人の女を連れて進入つて來た、而して彼等は吾々の坐つて居る前の大きなる椅子に腰を掛けた、他の者は地上に蹲いて居つた、斯うすると一唐人が此者を吾々に紹介したが、是は太陽王といふ綽名のある、ヌコンベーといふ者ださうだが、成程其頭に冠りし帽子などにも、何か金の糸の様なものを附けて如何にも太陽を頭に頂いて居るやうに見せかけて居る、

此太陽王は此國の建設者である、イチンガの王のレンブローレーが死去した後でメコンベーはガロアーの王となつた、レノックケーと稱する者にレンブローレーの跡を相續させなければならぬのを、其權力を奪つて仕舞つた、太陽王が位に即くまではレノックケーが此邊の總ての權力を握つて居つた、處がメコンベーが位に即いてより以來總て此國を開放して仕舞つた、第一白皙人種の力を借りる必要を認め、此力に依て自己の財產を作り、權力を益々擴張しやうと云ふ策を執つた、夫故に彼は遠征會社の役員などを自分の家に引つけ、中々鄭重に取扱ふ、而して此メコンベーなる人物は最も下賤なる奴隸的人物で、又最も暴逆を逞しうしたものであるが、即位以來殘忍の行ひを改めて溫順を裝ひ、善惡邪正を十分明白に判斷する、夫故に先づ此近邊の土人奴の中では最も怜悧なものと稱されて居る、殊に吾々が彼の家に是非往くと云ふことを聞した時分に、彼は餘程喜んだ樣子であつた、

是より先きウオカー氏は一の小さなる小屋を建て、吾々の住居として呉れた、直に其家に這入らんとした所、此の小家はまだ十分に用意してないが爲に、メコンベーは連れて來た婦人に命じて、他の一の小屋を立てどころに掃除することを命じた、ゲ北處に這入ることになつた、メコンベーは吾々に芭蕉や烏などを贈つて呉れたのみならず又再び婦人をよこして薪水の勞を執らしめるなど、至れり盡せりの待遇をしてくれた、

オゴッコー河は遠征會社の下の方に於ては僅に二百米突より二百五十米突の幅しかない而して其上流に於ては二つに岐れて居る、一は即ちゥエガッィッと稱する河で、一はアサンゴの湖の方に續いて居る、此湖水は此邊の最も大きなるもので、其他にも小さな湖水が二三有る、アリクンナンゴの正面には島などがあつて、河の幅は殆ど千二百米突より千五百米突の大きさに達して居る、河の對岸の樹木の茂れる中に

ランバレチーの村がある、此河の幅はヌクビエ河の河口にまで間と且數を持つて居る、

六月十一日、我々は全く移轉することが出來た、吾々は乾燥せる時期、即ち六月七月八月の間は此處に滯在しやうと考へた、吾々と共に居る一人の料理人はヂコと云ふ名でありて最も忠實なる者である、其外にガボンより獵師を連れて來て居つた、吾々は可成此地方の人民に決して惡意を持つて居るものでないと云ふ事を知らせるやうな工風を執つた、商業に障害を與へるとか、或は此國を奪ひ取らうなどゝ云ふ意思は更らになく單に狩獵者であると云ふことを知らしめるやうに盡力した、

六月十三日、コンビュギュ氏と予は、一の獨木舟に乘つて對岸なるクンバレチーに往つて、イチンガの老王なるレノックを訪問しやうとした、河を横斷りながら二三の水鳥を見たが、打つことが出來なかつた

大猩々の他及王陽大

而してマンクェーの村まで進んだ此處には英吉利人が管理して居る運送會社がある、此英吉利人は此國の風習に染みて、衣服などは彼等と同樣な物を着て居る、折あしく此人は不在であつたが、コリスコの黑奴であつて、英佛の兩語を巧みに操つる店員が吾々を厚遇してくれ、加之吾々を王宮、否な陛下の小屋に導くことを承諾した、斯處に住つて暫らく待つて居る中に王は現はれた、木綿の布を以て製へた帽子を被つて我々に面會した、

吾々は通辨を以て是に言はしめるのに、此地に餘り滯在しない積りであつた爲に、土產物などを持つて來ることが出來なかつた、併し他日また來る時分、若も御用があるならば何なりとも、持つて來ると云ふことを以てした、所が王は、「今般だけは許して遣はす、又汝の親厚なる意思を謝して置く」と云ふ返答をした、夫故直に袂を分つてランバレヤーの方に進んだ、既に吾々が此地に往くと云ふことは通知してあるからレノ

ツケーの王は、吾々を過する用意をして居つた、直にレノックーの宮殿否な小屋に進入つた所、彼は竹を以て製した腰臺の上に坐つて居つて、吾々を其物らに坐せしめた、而して奇妙なる手つきをして吾々の顏を暫く見て居つた、通辨は、吾々が佛蘭西人であつて、司令官の朋友であると云ふことを話した所、彼は往時エーメー大尉が締結したる條約書を持ち參らしめて、自分は白帽人種の朋友である、又何か用があるならば、予が支配の下にあるものを使用して呉れろと言はれた、吾々は彼に贈り物をして、此處より餘途アダンリナンゴに至るまでは絕えず雇を試たが、餘り好穫物もなかつた、併し食鳥は隨分多いやうに見受けた、それより歸つて來てメコンベーの所有地なるアダンリナンゴを離るゝ少許の所に往つて又雇を試みることにした、

予が此村に殘つて居つた、一日の事、コンビエヤユ氏は獵夫を連れて、前日よりメコンベーの領地へ出立した、家に在りし予は此の日常ならぬ

喧嘩の聲を聞つけた故、何事か起りしかを確かめんが爲に、予に附いて居る婦人に問ふた所、彼はあれはコンビニーの一人を生擒にして殺した故、それで其妻女等が泣き叫んで、今其報告をしに來るのであると答へた、予は此答へを聞きて直に大陽王の所に人を遣り、而して索內者を與へて曳れろと云ふ事を請求した、然るにヌコンベーは直に答書を贈つて、其生擒を殺したのは私の生擒である、併し直に捕べさせて上げませう、又自分もどうして死んだかと云ふことを見物せん、若も卿が此處に來ることを望むならば、それを御覽に入れても宜いと云ふことを言つてよこした、夫故に予は直に、是非さう云ふ場合には知らせて曳れろと云ふことを以て答へたところ果して正午頃になると一婦人が予の許へ來て直に出向けと云ふ命を傳へた、因つて予は一僕を從へ、獨木舟に乘つて、其死骸のある所まで往つて見ると、慘酷なる散其の死骸は足を樹に綁附けて、倒にぶら下つて居る、恰も予が數日前に見し大猩々の

如き体裁をして居る、此死骸は此のまゝ此の河原へ殘されて墨牢雨の節に水が殖える時分に持去られるまで拋擲つて置くのだそうだ、大陽王ヌコンベーは先つ第一に自分が衣服を着替へた、即ち今迄の衣服を脱ひで此國の常で綴つた一の上衣を着し、然る後自分が連れて來た一人の者に死骸を解剖することを命じた、其者は剃刀を執つて腸腹の上部の方を斬り始めた、餘り熟練して居ないと云ふ事を見てか、ヌコンベーは自から其剃刀を執つて、さうして先づ臟腑を拔き出し、然る後別に一つの刀を出して胸骨をとつて心臟を檢査した、心臟には傷は附いて居らなかつたけれども砲丸が大動脈管を貫ひて居つた、是より諸所を解剖して後、ヌコンベーは予に此者は十分に食料を食して居つたと云ふことを話し、最後に此者は全く殺戮されて仕舞つたと云ふことを宣告した、是が濟むとヌコンベーは先つ手を洗つて其手を一婦人の頭の上に置いて乾かした、是は一の呪ひであつて、其の婦人は喜んで手

を乾かさしめる、此儀式が濟むと河の水の下へ持つて往つて死體を捨てゝ仕舞つた、

ガボンに於て國人の崇拜する山川水石其他動物の木像等はムンゲと稱へるものが最も貴まれて居る、是はオガンガと稱する呪者が拵へるので此のオガンガとは諸病に効驗を見はし、又總ての者に幸福を與へると云ふので尊敬されて居る、此のオガンガはブンドと稱する海物で拵えるが、之を飲んで死ぬ者が多い、命も戰ひに往くとか、商業に往く前には必ず一の祭禮を行ふ、然るに是はオガンガの興かる所で、決して祭をば無料は爲ない、金を取つて執り行なふ若し此處に人があつて病氣なくして死ぬやうな事があれば、直に其死の原因は誰にあるかと云ふことを尋ねる、木像を製して而して讐者の力を借りて祟ねるのである、

予が村へ歸つて來た二三時間後にコンビュヤュ氏も歸つて來た、而して彼が談す處に據るに前夜彼は獄の爲に疲勞して天幕の中に寢て居つた所、十時過に婦人が叫びつゝ走つて來た、此間殆ど一時間餘に渡つた、一向理由を解せないから婦人を迫ひ拂つて其理由を尋ねた所、一も要領を得なかつた、又彼は狩獵中一人の男に命してアンチロップを捕ることを命じた、獵夫は草の中に隱つてアンチロップの來るのを待つて居た所、忽ち藪中に音がした、直に一發放すと、手答がした故に、其處へ往つて見ると、アンチロップにあらずして、コンベーの奴隷の一人が倒れて居る、彼は驚いて飛んで歸つて來たが、幸に予の命令の下にあつたから爾も極めて輕く出く治まることが出來たといふ事であつた、

七月十六日、シンクレール氏がツムキタと云ふ所に、鹽漠及び其の他の產物を買ひ占めんが爲に往くと云ふことであるから、予も同行することになつて河を溯つた、アダンリナンクンゴとヲパレチーとの間を過てメグニエの河口に到着した、是は西南に流れる大河で兩岸はバカレー

族が棲息して居る、此處に一火島があつて北島の傍に犀が頭を水より出して太陽に温めつゝ眠つて居るのを見た、此處で射撃して見た、其中の五六は無論的中したに相違ないが、慨むべし皆水中に沈んで了つて、つまり徒勞に屬した、

此邊には犀が非常に多い、之を殺すには夜が一番宜く、又陸上に居る時分に打たなければならぬといふ事だ、若し水中に居る時分射撃すると、縱令んば的中するにもせよ、今の如く水中に沈んで了つて數日の後にあらざれば浮て來ない、予の如きも一頭は確かに殺したに極まつて居れども到底之を獲ることが出來なかつた、犀は餘り恐るべき獸でない、時々は獨木舟など覆すと云ふことだが、吾々が二三度遭遇した處によれば決して人の乘つて居る船へ來て襲ふと云ふやうなことはしない、一般に此獸は猛烈と云ふよりは寧ろ極く臆病であるといふ方だ、夜は陸上に上つて草原に眠る、時としては水中に居ることもある、若し何か

事があると、直に水中へ飛び込んで決して戻つて來ない、

サムッタに往くには二日間村から村を過ぎて、始終船中に日を暮した、予が次なるシンクレール氏が商業上に奔走する間は、予は此地の人情風俗植物動物などの事に就て十分に研究した、

此邊の地は獨に、も昔へる如く、バカレー又はアカレー族が棲息して居る地で一般に商業的特獵的人種である、家屋の建築などは極めて粗造で不潔を極めて居る、婦人の如き僅かにバッファン、婦人だけが見るに足るのみである、バカレー人の衣服は歐羅巴の布を以て拵えたる物を腰に纏ひ、時としては襁褓又は背廣の如き物を着て居る、婦人はガボン婦人と同樣に真鍮の環を足又は手などに附けて居る、婦人は非常に硝子玉を好んで、珍重して居る、子供の如きは頭から足まで硝子玉を以て飾りつける位だ、

七月十八日、サムッタに到着した、オゴッゴー河は此處では八百迷より

九百迷の幅がある、其中に木の生えた島があつて、乾燥時節には砂の所まで現れて來て其處に犀が集つて居るそうだ、予が旅行したる時節に於ても犀が群をなして居るのを見た、併し雨の時節になると彼等は入口に上るか、さなくば他の小さなる河の方へ避けるといふ事である、

サムヤタは此河岸に位して居る、此處に一の運送屋が在つて借用ある黑奴が支配して居る、村は此處より遠からざる所に在るが、其中央に河が流れて橋が架つて居る、吾々は村を一見しやうと思つて橋を越えた、此入口には小屋が澤山建つて居る、此處へ入るには門を通入らなければならぬ、小屋の切などは竹で造つてあつて極めて簡造であつた、砲丸などを以て容易に打ち碎くことが出來る、吾々が此村内へ通入るのを見て婦女子は非常に驚いて逃去つた、併しながら吾々が決して危險な者でないと云ふことを知つたが爲に再び戻つて來た、此の村の酋長は甚だしい大酒家で、吾々に芭蕉の實、及び鶏を贈られた、吾々が歸る時分

には運送會社まで來て、吾々の贈物を貰はうとした故に、吾々は彼に彼の尤も好める酒を贈つた、

翌日コンピエヤユ氏と予とは路を別けて狩獵せむとを約した、予は一人の案内者と共に出立したが犀の群に遭遇した、吾々は此處で犀は獲なかつたが一つの猿と二三の鳥とを獲た、コンピエヤユ氏は予の如き獲物なくして正午頃に或地に於て相會した、夫れより相携へて再び獵を始めた所、此近傍に於て一の死體が藪に包まれてあるのを見出した身體は總て鳥獸に啄まれて骨は四方に散亂し僅かに頭骨の殘つて居るのみである、そこで弱かに非の頭骨をば荷物の中に仕舞ひこんだ、是は他日人類學上研究の材料にせんが爲である、

翌日此處を出立して、ヤダンリナンゴへ歸つて來た、太陽王は予を過ずること更に以前に變らない、予は滞在中再び彼に酒を贈つたが、予が留守中は之を飲むとが出來ない故に吾々が歸つて來てより、日に何

回となく、吾が許へ來て酒を請求する、此に於て予は九十度の亞爾個保兒を飲ましてやつた、彼は妙な顏色をして之を飲まうとした爲、予は其結果が如何なる徴候を呈するやと云ふことを心配した、處が彼は先づ第一に口をコップに附けて嗅ふのに、次は斯の如き香味なる酒を持つて居りながら、何故今迄予に飲ませなかつたか」と言ひ如何にも愉快氣に飲み始めた、吾々は只茫然として之を見るのみである、吾々の惡意は彼等に向つて非常なる馳走になつたのである、是からは毎朝來て白き酒を呉れろと請求して已まない、夫故に吾々は時としては水を飲ましてやる然すると彼は非常に怒つて立去る、立去るかと思ふと間もなく來つて亞爾個保兒を請求して已まないから、其時又一杯を與へると、彼は欣々然として立去る、

第五章

七月二十五日、ヅロンゾと呼ぶ大湖の邊に探險を試みん爲に出發した、此湖水はオゴウエー河の左岸に位し、三個の支流と連絡して居る、其中の二つはボンド及びアコンベーと稱しオゴウエー河の河水を湖に注入する、他をムコモ河と稱し湖水よりオゴウエー河に注ぐのである、此湖水の廣さは大したもので、此地方の最も大なるものと稱せられて居る、又此湖水には數多の島嶼があるが、其中の二つが最も吾々の爲に研究すべき材料を與へる、それはフェチッシと稱して豫て海軍々醫なるグリッフォン、バレー氏より聞いて居つた所のもので是等の島は水鳥の集會所、其數は數萬に下らぬと云ふことである、又此の島に就ては種々なる怪說が黑奴中に傳播して居る爲、此地へ足を踏み入れる者は一人として帰らない、實に此島は見るさへも面白いのに、殊に博物學を研究する吾々に

ムンゴ湖

對しては一番價値がある、吾々は僕と獵師とを連れ、買求めたる獨木舟に乘じ河を下つてアコンベー河まで往つた、是よりして此湖水に通んだのである、此の河は隨分大きく且つ深くして、兩岸は蒼々たる樹樹に掩はれて居る、乾燥の時期に於ては水が殆ど涸れて、此河でさへも到底湖水まで船に依つて往くことは出來ない、

吾々は湖水の入口まで到着した、其氣は實に快絶清絶で眼前には鏡の如き水が靜寂として青き姿を湛いて居る、其の鏡の如き水面には綠樹重疊せる小島が點布して島の彷ら岸石には水鳥が群をなして居る、我々は此邊の土民が一つの村を拵えやうとして、今しも工事中なる小島に往つて泊ることになつた、此島に往つて、厚遇されたが、フェッシ島に就ての詳細のことを聞出すことが出來なかつた、又それに往くべき道さへも分らずに仕舞つた、蓋し是は彼等が吾々の如何なる人間であるかと云ふことを疑つた爲、話してくれなかつたのである、

翌日吾々は早朝より順風に乘じて出發した、併し順風とは言ひながら風力は強い、湖水は荒れて居つて危險なることは勿論である、殊に舵手としてゴンゼルフ人はがボン人や其他の者の如く、怒濤などに就て更に經驗が無い、夫故に斯の如き場合に際しては戰慄して仕舞ふ、餘儀なく島の陰に船を寄せて風止みをなし風力の弱くなつた時分再び出發して、他の島の間を廻つた、此島の中には猫が居つたから、一番猫を獵しやうとして奔走した、然るに是等の島と云ふものは總て草が深く、到底足を入るゝことが出來ない、夫故に獲物などを見出すことは中々難い、已を得ず、斷念して暫時休憩、フェチッシ島に就て十分の取調をしやうと再び船に乘つて進むと岩の上にはイビス鳥が棲息して居るので之を打ちつゝ進んだ、是より一層先に塘鵝が居つた故に船より下りて射擊すると直ちに湖水の力に飛去つた、コンビュヤ氏は此島の行く先を眺めて居つたが、其止つた所に白色の島があると云ふこ

とを認めた、是こそ彼の有名なるフェチッシ島であるに違ひないと思ふて、直に船に飛乘つた、舵手等は吾々の樣子が餘り慌忙て居るのを見て驚いて直に櫂を執つて東北に向つて進んだ、是よりして一の島に渡つたが、此處には此地の王と稱するやうな者が居つて其部屬を支配して居る、島は極めて小さく其配下はどの位あるかと云へば、二人の女と三四人の子供及び二人の大きなる奴隸が居るのみである、王は吾々に一の小屋を貸して與れた、小屋と云ふても四本の柱を立つて屋根を作つたのみである、併し雨だけは十分に避けることが出來る、此處よりして遙かにムゴッェ島を望む、樹木が茂つて居つて島が幾萬となく群をなして居る是ぞ即ち一名をフェチッシと呼ぶ島である、予は國王に土產物を獻じたが國王が此邊の島は自分の所有であるから此處で殺す鳥獸に就ては代價を拂へと云ふ事を頻りに主張した、斯の如き貪慾な事に耳を傾けて居るは堪られないから、予は鳥などは誰にも屬する

ものでない、吾々は悲むだけ銃殺する者も吾々の朋友たることを覺まないならば、直に此處を去つて、人の居ない所の島に往くと斯の如く嚴重に言ひ放つた所、彼は今迄の言葉を取消して、決して前に言ふたやうな事は再び言はぬと云ふ事を誓ふた、しかし夫故に少量の酒を與れろと云ふことであつた、夫故に予は酒を與へた所、是より屢々訪問して酒を請求する、餘義なく少しづゝ與へて其日を過した、

其夕方よりして鳥を打ち始めた、吾々に隨つて來る者等は、必ず此島の神樣が怒つて吾々を罰するに違いないと言ふて戰慄して居る、已を得ず彼等を船に殘して上陸した處、忽ちにして塘鷸の群に遭遇したから射擊を始めた、是と同時に幾千萬の鳥が一度に飛ひ出し海なる壁を發して吾々の周圍を飛廻る、斯くしては再び戻つて其處の所に留まる爲に數十發連射することが出來る非常に獲物も多かつたが、黑奴等は心配顏をして、如何なる事に成行くかと考へて待つて居た群を爲して居

る鳥は一發の砲聲の下に落つるしかし神樣が別に怒つた樣子もなかつたから上陸して落ちた鳥を拾ひ始めた、連れて來た二人の黑奴も上陸して吾々と共に射擊をした初めの日は餘り好結果を得ない殊に少し雨が降り始めて來た故に隨行の黑奴等は是こそ神樣が罰ひを爲す前兆だらうと云ふやうな考へを持つて居たらしい我々は更に驚かず益々鳥を殺戮するようにした

數日後にアダンリナンゴに歸りなければならぬ事になつた、それは火藥銃丸が殆ど盡きて仕舞つたから之を補ふ爲めである、コンビュヤエル氏は一人アニチッシ島に隨行者と殘ることになつた、予に隨行せる者等はバンド河を渡ぎる事を肯んじない、其理由は言はないけれども、予の知らざる中に方針を變へて他の道から往くやうな事をして居る、予は磯石を取出して是非共バンド河の方の路に往くべきことを命じた、然るに彼等は磯石が多く在つて其路の方に往くことが出來ない

と云ふて其行を肯じない併し予は彼等の首を容れずして、其方の道を通つて十分に研究の材料にしやうと云ふ考で船を進ませ遂にバンド河の河口に到着した、北河口より河の模子を見ると此船位は優に通せるだけの航路は十分ある、そこで黑奴等が此處を怖れて吾々を他の路より導かうと云ふ考を起した理由を察することが出來た、バンド河は此湖水の入口にあつて犀が群を爲して居る、夫故に隨分危險である、予は今迄斯の如く犀が非常に群を爲して居るのは見なかつた、不幸にしてコンビニャコ氏の許に火藥と銃丸とを殘して來て、予は其儘かを持つて居るのみであつた爲、見す見す之を十分打つことが出來ない併しながら此儘には船を通すことが出來ないから此路を避けしめて航路を開かなければならない、是に於て予は發砲せんとすると彼等は予が袂を引いて「打ち給ふな、打ちたまふな、若し打つたなら吾々は犀の餌食になつてしまふ」予は袂を拂つて之を承知せず、十分狙ひを定めて最も

大なる犀の頭上に一發放つた、其時犀の群の混雜は名狀すべからざる程で總ての犀は一度に水底に影を隱した、斯の如き有樣を見た黑奴は戰慄して其顏色蒼然であつたが、其中に聲を揚げて闘を作りつゝ奇妙なる聲を發して、「犀は白哲人種を怖れる、白哲人種は犀を恐れない」と叫けんだ、而して彼等は予が放つた銃丸で果して犀が死んだか否やと云ふことを見極めんが爲に暫時滯留しやうと請求する、然るに最早暮靄なども蔽きて仕舞つたから一分時たりとも居ることは好まない故船を進ましてバンド河を過ぎた、其夜はオボッコー河畔なるガロアーの村に泊り鶏鶏を煮つゝ極めて悩れなる夕飯を喫した、此邊でスープを拵えるに鶏鶏は最も好材料となつて居る、食事を終つて疲勞を慰めんとして居る所へ予が連れて來た僕常が今白哲人種が河を上つて來る其數は四十人ばかりで、それより後には尚は多くの人間も居るやうであると報告した、其他の者も同じ報告を持つて來る、甲は二十人と言

ひ乙は四十人と言ふ、其他は一軍隊とも言つて確かなる事は分らない、予は以爲らく、日頃聞いて居つた岡逸軍隊がオガウエー河畔に遠征を試みに來たのであらうと、

其中に予が居る所の河岸へ到着したと云ふこと故、予は隨行者の一人を其群へ遣つた然る所其の使者が歸つて來ない中に、ガボン人が予の傍へ來てキトー將軍が到着されて、卿に是非會ひに來い、共に食事をしやうと云ふ事を言はれた、と云ふことを告げた、是に於て予は岡逸人にあらざることを知つて安心をした然も若が同胞であると云ふことを聞いて、大變惡しく感じた、

予の衣服は長途の旅行に破れて招待などに應ずるやうな物でない併し若幸の衣服とてもない依て其儘直に船に乘つて、將軍が碇泊したる所に到着した、其處にはウェス號の船長シャルヽヴュハルレー氏及び軍醫がイキュロン氏が居つて予を待受けて居つた、

キトー將軍は南部太西洋の艦隊司令官でマンチー號で來られたが、カランガの湖水で獨木舟に乘換て佛國と締結せる條約に依て佛領西の領地となつて居る區劃線まで檢分に來られたのである斯の如き人に來られては、予の探險上に於て特別なる點に於て一方ならぬ幸福になる、併し將軍が予を過ることは非常に厚くして巴里に有名なる料理店の割烹師を連れて來られた故に、此僻地に於て、大都會に居る如き食事をしたのは實に意想外であつた、

翌日予は將軍と共にアダンリナンランに向つて出發した、夫故に予の住つて居つた所の小屋を將軍に貸すことにした、早朝より家を開いて掃除をなし、空氣を入れて留守中立籠めて置いた一種の臭氣を清らかにしやうとした、其後にヌコンベーを呼びにやつて、而して將軍と通譯とを爲すことにした、太陽王なるヌコンベーは自分の國を佛領西に最上すると云ふことを言つて居つたが、將軍が來られた故に、直ちに其

條約を締結して仕舞つた、

翌日我々はフェチッシュ岬を探險した、將軍はレノックーの村なるランバレッーで足を留められたが再びアダンリンランゴに歸つて來た、將軍は是よりまたオゴウェー河を下て內地に探險を試みられた、

予はコンビエヤユ氏が待つて居ると云ふことを知つて居るから急いで山殺して其晩湖水に到着してブンダーの島に往かうとした湖水の島のある高い所に往つて、我々が歸つて來たと云ふことの信號をした所、數分時間の中に松火を燃いてコンビエヤユ氏が待つて居ると云ふ答へをした、急と歸着するや余は旅行中の事などを話し、又氏は予の留守中の事を話られた、彼は予が不在中に大猩々を獵せん爲に、オゾムァン湖に往つたが其旅行は非常に危險であつたと云ふことであつた、是より後數日間、我々は再び獵に赴いた、此處に二箇の大猩々が居ると云ふことであるから、それを捕る目的であつた、其地へ着いたのは日暮で

ルーリゴ

ある、此邊の地を歩むことは實に困難で疲勞も亦甚だしい――枯木の上に鳥の巣の如き物が見える、是は何であるかと隨行者に聞くと、是れぞ即ち大猩々の小屋で樹に登つて其内部を檢査すると何物も見ない、只僅かに大猩々の毛が散在して居るのみである、其毛を取つて嗅つて來たが不幸にして失して仕舞つた、此樹に作られた巣は甚だ堅牢であつて体量の多い獸を能く安へることが出來る、予も其中に這入つて見たが予の体量より一層重量な物を安へることが出來るのである、

此大猩々に就ては詳細な話を黑奴より聞くことが出來ない、しかし此雌が兒を姙た時分小屋の中に居つて雄は木の下に眠ることになつて居るといふ事丈は知り得ることが出來た、

シュシュー氏が大猩々の事に就て書記した物がある、此人は彼の多く棲息する地方に往つて長い間之を獵する事を專問にして居つたが、今日は倫敦の大博物館に當時携へ歸りし種々の大猩々を陳列してあ

る、併なから種々な話の上に於けるゴリールと云ふものは針小棒大になつて居つて信じ難いものである、併しシュシャユー氏の話だけは信を置くことが出來ると信ずる、

予等は大猩々獵に就て最も不成功であつた、併し雄三頭、雌二頭を持歸ることが出來た、其中の一頭は此邊の村で獲れたので、それは人々が寢に就て靜つた時分黑奴小屋の上に奇なる一種の音がした、必ず是は悪漢が芭蕉の實を盜みに來たのだと考へて、銃を持つて來て狙を定めて打たうとした所、彼は其銃口を掠つた、餘儀なく一發放つと、此物は急に逃げて往つたが、翌朝になつて土民が其倒れて居るのを見出し、全村鼎へて觀に往くから、予も共に往つて見て驚いた、矣も其の體最大なる大猩々が地上に死んで居つたのだから、……頭の方は砲丸の爲半ば失なつて居る彼が銃を握つたのは怖らくは銃を掠り潰す積りであつたらう、しかしそれが爲に、自分が斃されたのである、

野々は大猩々の害を蒙つた、二人の男に遭遇した、其話に據ると其一人は大猩々に向つて砲殺しやうとした處如何しても彈丸が發しない、然るに大猩々は向つて來て、肩の肉を持去つた、一人も同じやうな話で、背中の肉をとられたと云ふことである、決して大猩々と云ふものは、此方で激させない以上は抵抗するものでない、人を見れば何れへか影を隱すことに極つて居る、夫故一たびむかへば必ず向つて來る、予がオグムアン湖の彷にありし時分獵夫コベンは一日大猩々を狩りに往つた處目前に三頭の大猩々が現はれた、而して二度發砲して二度とも打損なつた此に於てコベンは逃出して來ると、大猩々は跡を追掛けて來てコベンは殆んど捕まへられやうとした、併し卒ひに逃れることが出來た、黑奴も大猩々は温順なものであつて決して自から人を害するやうな事はしないと言ふて居る、夫故萬一大猩々に遭つた時分には武器を捨てゝ彼に惡心がないと云ふことを見せなければならぬ、彼は武器を、大

層怖がる、殊に刀の光りを恐がる、決して彼は猛惡なものでないけれども、只其體格の大きいので、人は一見して驚くのである、

オグムアン湖はゾーナンゾー湖と連絡して居つて、北連絡には狹き河がある、又北彷にはイヤンカと稱する湖水があつて是に依つて連絡されて居る、此湖畔に土民が棲息して居るがファー人に較ぶれば勞働に堪へ又勇氣もある、是等は護謨の耕作の農に餘程內地まで深入して居る、湖水の南の方に一のフェチッシ島がある、此處にも鳥が非常に居る、御覽みならば樂內しやうと言ふものがあつたが、其島に往くと神が居つて人を喰殺すなどゝ云ふ話をした、我々は直に北處へ往くことに極めたが誰も同行を肯んじない、餘儀なく、此處を出たならば島影を見ることが出來ると云ふことを以て我々は進んだ、四時頃になつても一向島影を認めない、尙ほ進みつゝある中、コンビエギュ氏は遙かに白き島影を認めた、直に其方に向つて船を進めて漸くフェチッシ島に到着

した、然るに不幸にして此島には鳥が住んで居らぬ僅に二三居るのみである、夫故我々は此處を引返して、それよりゾダンリナンゴに向つて歸ることになつた、

第六章

八月は一年中の最も冷しき月であつて、寒暖計は二十一度まで降り、二十九度より外らない、

九月一日獵より歸つて見ると、全村騷げて騷がしい樣子で男は銃を執つて高丘へ攀ぢ登りつゝ觀察に怠らない、夫故予は其何故なるかを聞かんとして黑奴等に質したる所、バカレー人が耕作に從事しつゝある二婦人に向つて銃擊したと云ふことであつた、吾々は其狀況を目擊せむとして河畔に往くと幾百の婦人は一人の死せる婦人を戰せし獨木舟を取りかこみ、奇聲を發して己が掌を以て水を叩きつゝ復讐の聲を

爲して居つた予は此有樣を見て居ると傷つけられたる女の眞人が我々の所に來て負傷したるのを治す工風はなきや否やを問ひ予は此者と共に居き女の居る所に導かれた、是は婦人とは云ふものゝ率ゐる子供であつて、趾の上に殺て此邊の惡意なる者共に看護されて居つた、予は小屋に入つて負傷者を十分に檢査したところ鐵丸の餘程大きなのは股の邊に打込むでである、其他小さなのは、只僅に皮の中に遺入つて居るのみであつたから直に拔き取ることが出來た、予は消毒藥を以て之を洗ひ而して其眞人に向つて、斯の如く多人數が彷ちに居ることはよくないと云ふことを厳しく命じた、

夜に入つて再び予を呼びに來たから往つてやつた所熱が大層出たと云ふことと故、規尼溫を二三丸與へた、是より數日間經つて予が此地を出發しやうと云ふ時分には此婦人は全癒して居つた、

九月五日、アロヲルと云ふ黑奴と河を下つて、ガボンに歸ると云ふこと

に決した、而して此地に於て蒐集した物などを纏め送つて仕舞つて、オゥエーの上流を探險しやうと云ふ考へであつた、今度の歸途は最も疲勞を感ずる、最も困難なる行程である、水は淺くして船を容易に通せしむることが出來ない、殊に予とコンビエヤユの二人とは又々熱病に罹つて苦んで居る、

九月六日、ウコンボと稱へる村を過ぎた、我々がウコンボ村へ到着した時分には、獨木舟の旅に深て居つた、然る所忽ちアモラルは聲を擧げて「注意せよ、今吾々に向つて發砲せんとする者がある」と叫けんだ、是ぞ村の若者共が河畔に居つてアモラルを殺して、獨木舟の中に在る食料などを奪取らうと云ふ積りであつたのである、聲を聞いて我々は直ちに枕を蹴つて立ち上り、銃を執つて發射せんとするや彼等は司令官の朋友なる白皙人種が居るのを見て、忽ち銃を撤して、何れへか逃去つた、其他の者は殘つて居つて、決して我々のした事は眞面目の事でないと辯

解を試みた、斯の如く言ふけれども、彼等は無論アモラルを殺して、物品を掠奪せむと云ふ考へであつたのである、

九月八日、ロベー岬に到着した、此處に佛蘭西人の某氏が居つて、ブラトーまで吾々を其船に乘せて進かんと云ふ厚意を持て來れた、併ながら連れて來た同伴者は內地に往つて居る爲、それを待たなければならぬ、夫故に八日に到着して二十日になつて出發するやうになつたのである、それで此ロベー岬にロンベと云ふ島がある、吾々は其地に滯在して居つたが、此島程不便な所はない、水も無ければ食物もない、僅に鷄があるのみで、殊に熱病に感じてゐる我々は床上に苦んで居るのである、殊に殘念なのは、我々が十分に療養の出來る地と云ふものは此處を離れる僅であるが、此處まで來て其處にも往くことが出來ない、吾々は力なて某氏が內地より歸る人を待たずに出發することを勸告した、

吾々が到着してから二三日跡の事であるが、此ロンベー島の五婦人が

ウブンゾーを飲むと云ふ事を聞いた、ウブンゾーといふのは毒藥で、既にクリスの事を前に書き記したが、此ウブンゾーは水中の草から製するものと見える、一種の斯爲利幾尼湿性の滋味を帶びた毒藥で飲んだ後に於ては一種の滋味を感ずるものださうだ、

メシヤンゴの王の母が病死した然るに此邊の黑奴は死と云ふことは自然の結果であると云ふことを知らない、人が死ねば必ず毒殺されたとか、或は呪詛の爲に殺されたとか云ふやうに直に考へて仕舞ふ、夫故に前の五人の女は罪を負つて、是等の者が王の母を殺したと云ふ罪に陷つて、之を確めんが爲にウブンゾーを呑まされることになつた、我々は王に請求した此儀式を觀たいと思つたと全時に、其不幸なる婦人等を助けてやりたいと云ふ考を持つたから、携へて來た藥籠を持つて往つて、器械を以て之を飲ませやうとした、

我々は此島を發して、其儀式の行はれる所に到着した、此處に居つた黑

奴等は吾々を厚遇したのみならず、此儀式に吾々が列することをば容易に許した、此處で經文的の物を讀むことを習らく聞ひたらそれより一時間ばかり說教などがあつたやうである、午後を映して後四時頃になつて今日の儀式は他日に延ばされたと云ふことを耳にした故、之を見ることが出來ず、又其女を救ふことも出來ずして空しく歸つて來た、

九月二十日、某氏と共に此地を出發した、內地に往つた某氏の同伴者がまだ歸つて來ない故、乘つて居る者は一人のクルーマンのみで、是は殆ど舵を取ることを知らない事である、予が連れて來た獵師のフランソワーの方が熟練して居る、併ながら船は進行する、一日々々と日は經つて或る晩の事、水を請求した所、殆ど盡きて居る、予は乘船する時分に可成十分に用意しろと云ふことを命じて置いたに拘はらず、乘船の際十分なる監督を與へなかつた故に少量しか運搬しなかつたのである、加之自分の手許に用意してあるが爲に、彼等が自由に飲むものと見える、

三日目の午後、其風は吹續つて、海は隨て荒れて居る、五時頃、波は增ゝ高くなつて來て、七時頃に始めて暴風となつた、某氏は船を操つることも知らなかつたが、今迄は天候も穩であつたが故、別段困難を感じなかつたが、此潮になつては、我々が助力を與へなければならぬことに立ち至つた、コンピエギュ氏は熱病の爲頭を擡げることも出來ない、殊に食料は勿論のこと、火の如きも盡きて仕舞つた、夫故斯くして居つては、何時陸地へ着くことが出來るか、それさへも分らない、予は是に於て某氏の無能力であることを十分に認めたから、予に船長の役目を托して、足下はコンピエギュの物に乘て居る方が宜いと言ふた、是から予は某氏に代つて船長の仕事を執るやうになつた、全力を擧げて船を操つた所、率に船は漂へるやうな事もなく、錨を投じて船を停めて仕舞つた、

北夜は霄を徹して船に注意すると同時に、熱病の爲身躰燒けんばかりになつて居る、コンピエギュ氏を看護したが、其夜の寒さ加減は實に言

語に絶せる程であつた、船中に贈り込む水を掬出すので休む間がない、夜が明けて漸く天候も穩かになつた、率ひ風も眞いから、ガボンの方に吹き送られて二時に到着した、而して彼のコルドリエーリ號の物に往くと、我々が到着するのを見て、同船の諸友等は小艇を下ろして迎へて呉れ、ムクワン氏の如き特に午餐を拵えて飢えたる予を助けて呉れたガボンに到着したるより數日後、再び予はニロビと云ふ處に往つたが、此島は北緯一度、東經七度二分の所に位して、ムンダ河とンクワ河と合する所の中央に在る、此處には見るに足るべき物もなかつたから、ガボンに歸つて來た、

第七章

予は再び不愉快なる紀念を遺せるリンベー島に立歸つた、此處で船を雇つたが、同乘者はアセクルが隨從することになつた、其他種々なる荷

物、動植物、殊に猫、犬等、又男黒奴女黒奴を數十人戴せた、幸ひアモクルの周旋に依て此喧嘩なる同伴者中を離れて最も閑靜なる一席を占めることが出來た、而して徐に此處を出發した、水は河に充ちて流れは強い、尖故船が十分に進まない、餘儀なくアンシゴーの湖水の方より廻つて進むことになつた、此河流を逆ること三日程にしてアカロア河に着した、此河は湖水より出る河でオゴウェーに注いで居る、此航路を執るのは不得策であつて、非常に迂回するのであるけれども、又我々の研究上の利益に於ては最も價値がある、アカロア河は三個の河が合して流れて來る、加之此河に二つの湖がある、此湖水には水草が繁つて居つて非常に深い、其周圍には高き山があつて樹木は鬱閉として居る、此湖畔にはイビリス族が住つて居る、此處には殆ど首邸等はないさうだ、遂にアシンゴー湖水に到着した、此時は丁度夜で十分に水氣を眺めることが出來ない、而してバユスーフと呼ぶ老兵で、其邊の最も愛嬌者と

して聞判のある一人のセチガル人の監督せる運送會社の在る島の前に船を停めた、

十月十日、湖水を出發した、サユカツィザ河を溯つてアダンリナンゴに到着したが再びシンクレール及び太陽王の歡迎を受けた、昔てカレー人の爲に傷けられた女を妻に持つた眞人はわざ〳〵謝辭を述べに來た、其時の自分の妻を連れて來たが、予の爲に芭蕉の實と一の鶴とを持つて來て呉れた、斯の如き謝儀を爲ると云ふことは、黒奴に於ては實に稀なことである、然るに奇妙なのは又其返禮を貰ひ受けやうと云ふ考へで、妻は一個の空瓶を持つて居る、それで予が其空瓶に酒を充たしてやらない以上は、長時間戸の下に立つて待つて居る、予も餘り憫然に思つたから、瓶を受取つて酒を滿して與へた所、彼等は喜んで立去つた、

十月十四日、諸處よりアダンリナンゴに集つて來る黒奴は夥しい、

是は何か大事件が起つたに違ひない、予は黑奴等の事件に容喙ずることはしない、總て彼等の間に起つたる事は、彼等を以て處置せしむると云ふ予の原則であるけれども、到底仲裁の勞を執なければ事局甚だ不穩の工合である、此事件は彼等の任務に堪えないやうな重大なる事のやうに思はれた、

此事件の原因たるや、一人の奴隸近村なる大エノ村の一紳士を殺した一條で、國の法律に依ると此奴隸は死刑に處せられなければならぬ、何は彼が死んだばかりでは、到底一人を殺した罪科を償ふに足りない、其主人までも死なければならぬ、其主人と云ふのは誰かと云ふと、年老ひたる酋長で、吾が奴隸を殺すと云ふことに就ては異議は唱へない、喜んで差出すと言ふて居るものゝ、奴隸を殺すばかりでない、其國の原則に基づて主人まで殺すことを望んで居るが爲め、事局甚だ不穩な譯で、此終局を告げるには如何して宜いかと云ふと、自分が生命を捨てなければ此事は治まらない、己を得ず己の代りに其妹を差出さうと云ふことにした、然るにそれでは不十分な事であるからと云ふて承知しない、是に於て尙ほ三人の奴隸を加へると云ふことになつた妹は自分が犧牲に供されると云ふ事を聞いたから、非常に驚くまいとか直ちに其地を逃げ出して、我々の居る所に友人が居る處から、其處へ逃げて來たのである、是に於てか我々は太陽王を喚つけて、長時間彼に勸告した、即ち我々が此婦人を買取る、夫故此事は圓滑に處理せよと云ふ事を命じた、然るに彼太陽王は首を左右に振して容易に諾さない、夫故に我々は大に立腹して爲にヌコンベーは餘儀なく我々の議を容るゝことになつた、夫れより婦人を吾々の所に連れて來た、其婦人は感謝の餘り『お前さん達は妾を助けて呉れた人であるから、何でもお前さん達の爲ろと云ふ事をする……』とまで涙ながらに陳べ立つた、我々はもう是で此の事は治つたことゝ考へたが、意外なるかな數日後陰に此女等に刑を加へ

たさうだ、しかも其刑を行ふに就ては、太陽王が命令したと云ふことである、其の模樣を如何にといふに、

先つ第一婦人を仰向に臥して置いて、而して咽喉の上に木の幹を載せ、其上を數十人の人間が歩くのである、夫故何にか堪るべき咽喉は見るか中に潰れて仕舞ふ、萬々一死かたが遲いと、臟腑などを引出して曝す、といふ話した、予は此事を聞いて、只茫然自失するのみであつた、しかし最早事終つた後は容喙する必要もない、且つ彼等をして怒らせるのは、毒々の探險上に於て不便を感ずることであるから、只其不幸なる者を弔ふのみに止めた、

十一月二十七日、メジニェ河に探險を試みんとして出發した、此地方はウォカー氏が既に奥深く立ち入つて研究された處で、ウォカー氏はサンパの瀑布まで予に同伴された、此サンパの瀑布は非常なる高さであると云ふ話であるが、氏はまだ觀たことがないと云ふことである、ソ

エー河畔には樹木が繁茂し、河口には人の棲息せざる島嶼が二三ある、此河口には僅ほ五六の小流が流れ込んで居る、瀑の所より河口に至るまではフェチッシの岬を形つて居る、又瀑の所まで至る河畔にはバカレー人及びファカレー人が住つて居つて、護謨を重なる收穫として居る、オゴウエーに於て作られる護謨の如く大きな樹にはならないけれども、塊のやうな體狀をして居る、此塊の如き木は隨分大きく樹に搦み附いて居る、而して兩者を合せたる如き實が成る、色は赤く中には海綿的の所がある、が、黑奴は大變に喜んで之を食べる、しかし食後は何となく口中が粘るそうだ、

十一月三十日、サンパに到着した、流石の瀑布も此時分は高さは五ヒェからヒェ位のものであつた、吾々は蒸氣船を其物ちに停めて瀑布の有る島に天幕を張つた、是は右岸には最も接近して居つて、左岸は水勢激烈岩に衝つて白沫を飛して居る、此岸を辿つて瀑布の下まで往くこ

佐藤元尾

とが出來る、此河畔には山が聳へて居つて、山の麓にはイビリス、コンゴタンバなどの諸村がある、吾々が天幕を張つた所は絶景の地であるのみならず又面白い所である、此處に二個の小屋を造らした、一はウォカー氏の小屋には英吉利の旗を樹て、予の小屋には佛蘭西の旗を揭げた、又此近傍には木を立てゝ蚊帳を張るやうにして使丁共の泊る所を拵えた、此蚊帳は極めて薄き麻を以て拵えたもので夜は湯氣などを防ぐに適當して居る、彼等は麻を以て腰へ巻く布の代りなどにする、獗羅巴人に賣る物は其性質が粗つて粗造である、此村の高き所にはイビリス人が如何にも心配さうな顏をして吾々を見詰て居る中の三四人は武器を持つて來たが、吾々は決して危險な者でない、怖るべからざるものであると云ふことを示してから、自分の妻子等を呼寄せて、吾々に食料などを賣りに來た、

盤口、コンビュヤニ氏を始めとしてアクラル及予は村の方へ往つた、此

村は大層大きな村で、家屋の構造も堅固で、街なども中々廣く三四の横街が出來て居る、小屋は大概竹で拵えてある、吾々が此村へ這入つた時分は寂寞として人が居らない、皆小屋の中に隱れて出て來ない、夫故に此街を悠然闊歩したが、今では今まで隱れて居つた者が現はれて來て吾々の歸らうと云ふ時分には數百人に及んだ、併し婦女等は妙な聲を發して逃げ出す、男子は我々の側に來て何か話を仕掛け始めた、我々は此者等に頼んで獨木舟を借り湯の側まで漕ぎ行くことを命じたが、此湯布の側には今迄白智人種は足を入れないそうだ、それから又ィヴィヤの大きな村のブアリと云ふ所まで導いて往くことを約した

盤口、吾々は獨木舟に乘つて湯布の方に向つて出發した、此獨木舟は小さくして、水が淺處より侵入して來る、ウォカー氏は事故あつて予と一緒に來られないのみならず斯の如き獨木舟を以ては到底湯布まで近寄ることは出來ないからと止められたけれども遂に肯んじないで予

一人出發することになつたのである

始めの中は狹い谿間を渡つて河を往つたが流れは實に激しい漸く瀑布の下に達した處、其高さは豫想に反せずして如何にも高い、是に於て上陸して村の方へ往つた、路は岩を登るが爲に疲勞を感ずること夥しい、漸て村へ到着したる所、此村はメグニー河畔の丘の上に立てられて居て、河は西北に流れて居る、此處に建てられたる小屋は隨分數多く、幾つにも別れて居る、其構造の材料は總て竹である、吾々の還入つた所は廣く造られた家で、土民等は幾人となく吾々の側らに群つて、何事を言ふても彼等は喋々して、吾々の言ふ事を耳に掛けない、コンビニヤ氏は此地の主と談話をしたいと云ふことを言ふた、然るに群集中大軀幹の一人の男があつて席を進みつゝ「予は即ち王である」と云ふたから、予は此人に贈物をしたすると彼はそれを受取るや否や何れへか影を隱して仕舞つた、予等は其の意外に驚いたが、夫と同時に復た一人

の者が席を立つて「今立去つた者は王ではない、眞の王は即ち自分である」とてしかも側らに居る者を證人として叫びつゝ贈物を請求し始めた、コンビニヤ氏は將來の探險上に於て彼等を酷に取扱ふては可ないから寧ろ厚遇してやるが宜しからうと云ふので、是に贈物をしたところ、是も前同斷忽ちに立去つた、するとまた第三番に出て來たものが前同斷の事を言ふ、實に驚くの外はない、是に於て彼等を追拂ふことにしたが、先づ第一に、歩餐を喫しなければならぬ故に、何か此邊で買るものがあるかと問ふたところ、此群集は何へか立去つて、漸時にして芭蕉の實や、鷄を持つて來た、處が其價格は非常なる高値段であるから吾々は之を購求することを肯んじない、率ひに道中に於て多少獲物があつた故に吾々に隨いて來た所のイビリス人に、料理を命じた、彼等は予が使丁に料理を命じたことを見て、到底買はないと察し、非常に價格を下げて仕舞つた、終りには殆ど無錢の如くである、其互に競つて賣ら

うとする臘梅は非常に喧噪を極めた

時に忽ち一の聲が聞えたが、其聲が聞えると同時に、今迄の喧噪は止んで、女は何れへか立去り、男は群々の傍らに坐つて、暫時は寂として一言も發するものがない如何にして斯の如き變化を來したるか、其理由を見出さうとして居る時に、直き前の小屋より白き髮を生した立派な老人が現はれた、靜かに群々の方に歩を運んだが、頭には赤き帽を頂き手には鈴を附けた杖を持つて居る、彼等は皆彼の老人の前に跪坐し、老人は應をなして我々の居る小屋へ這入つて來て、群々の手を執つて自分の胸にあてた、コンビエヤユ氏も予も之に答禮をした、是は延ひもなくイヴェイヤの王であると云ふことは分つた、我々はイビリス人をして是に言はしむるのに『貴下の家來共が予等を僞つて種々な贈物を持つて往つて仕舞つた、夫故に貴下に贈るやうな品がない、僅かに是れのみである』といふことを以てして一瓶の酒と煙草とを與へた所、彼

は大滿足の体で、『予は白皙人種に御目に懸つたと云ふことを悦ぶ貴下は予の朋友である、予は貴下を子供の如く愛する』と如何にも正直らしく言ふて、我々を大に感せしめし後、最後に『何か貴下の所持する布の少許を與れないか』と請求した、成程見れば如何にも布が彼に必要のやうだから、持つて居つた布を與へたところ、是又大滿足の樣子であつた、

昼發後夜た船に乘つて進んだ、此邊の水流は急であるが爲に進むに非常な困難である、漸く六時頃になつてエタンバーの村に到着した、連れて來た者は、如何にしても是より上流へは進まないと言ふ、其理由たるや、川が非常に危險で、自分等が始めて導いた白皙人種を殺したといふては、我々の不名譽であるからと云ふ事である、是に於て我々は佛蘭西の旗を掲てゝ、而して白皙人種が入込んだ最局點であると云ふ目標とした、故に此場合にあつては進むことが出來ずして退かなければならな

ぬ、此イヤ、ニイヤの本村に往つて泊らなければならぬ、依つて一の小屋を發見しやうとした、其處では我々は實に冷遇されたのである、其處へ到着すると、本村の長とも云ふべき者が此處に來た、是には別に贈物もしなかつたが、彼は我々の席の傍に坐つて我々の連れて來た者に何か頼りに話して居つたが、最後に此處より他に好い所がある故、其處へ往つて泊るが良いと云ふて、跡から外の者も往くから先づ我々と一緒に來いと云ふ話であるから、已を得ず歩いて路でもないやうな所を往くと、遂に奴隷を入れる三四の小屋に入れた、吾々は之を見て非常に怒つたが、最早施すべき術がなかつた、奴隷輩は我々の所に來て、木の葉などを敷いて臥床を拵えて呉れた、其處へ寝やうと思ふたが眠ることが出來ない殆ど端坐して居つた、種々の蟲は飛込んで來て、身体を刺す、餘方なさに隨從者を起して、朝の六時に此村を出發し、吾々の船に遭遇ふとして、漸くデルタ號に到着したが、最早船の出發する間際であつた

北日はアカイロと稱する河にて、此邊を探究しやうと思つた處、黒奴が首ふには、此河を溯ること二日にして大きな湖水がある、其處には瀑布も何もない故に、探險を試みては如何であると勧めた、

翌日我々はデルタ號と共にアカイロ河の激流を衝いて進んだ、數哩の間は中々好く進んだが、忽ちにして一瀑布が前に現はれて、吾々の前路は爲に妨げられて仕舞つた、ウォカー氏は號令を下して「退却せよ」と呼びデルタ號は命令と同時に退かうとする拍子に船を岸の上に乗揚げて仕舞つた、時に沈没しやうとしたが、幸ひ船員の盡力で危險を免かれた

十二月二日、湖水を探險せむが爲めに、デルタ號に乘じてウォカー氏と共に出發した、コンビュヤユ氏は病氣に罹つてアダンリンゲンゾに滞留することとなつた

十二月三日、我々はズナンダーの湖水に至つた、此邊の有樣は前に觀た

時とは全然變つて居る、水が大層增して諸處に現はれて居つた島などは何れへか影を隱し、只だ湖水の御花として居るのみである、尖故に航海も至つて容易に、且つ安全である、それからオクエムエン湖に到着することになつて、ファッシ島を過ぎた、是は諸君の御承知の通りの島で、此湖水の極點に一小河があると云ふことを聞いたが、併し我々はそれを確めることが出來ない、奈何となれば此熱帶地方の天候の變ることは實に急激で、數時間の中に空は蔽り、暴風は吹き荒んで來る、我々の如き大霧の間に圍まれて太陽の輝き光りの外何物をも見ることが出來ず方角を失つてしまつた、

我々はッアミー運送店に一夜を明さんが爲に歸つて來た、盤山ッシンカ湖に通んだ、此湖中に島嶼があつてパカレー人が接息して居る、此ッシンカ湖の入口はンッチッシ島の後方に在る、既に我々が此地を探險してより四ヶ月になるがンッチッシ島は非常に變化して居る、以前此島に澤山居つた鳥も今日は一羽も影をとゞめない、我々が見た時分に枯死したと思つた樹も、今日は青々として茂つて居る、以前には石灰を以て掩はれたる如くであつた北白いものなどは何れへかなくなつて一望只蒼々然として居る

ッオカー氏はパカレーの村に何か談判の用があつて出て行かれたが此事が輝くや否や直に出て來りて、湖水の景色を寫影する爲め一の島に登つた、予は黑い布を被つて寫眞器を備へて居ると黑奴等は非常に驚いた樣子で妙な聲を發して逃去つて仕舞つた、其中勇氣あるらしい者は我々を距る數間の所に居つたが何も驚くべき變化が現はれて來ない爲に、草の中に身を隱しながら次第々々に我々の方へ進んで來た彼等は我々が如何なる事を爲すと思つたか知らないが、ッオカー氏がアルタ號より我々に向つて相圖をした故に、我々は直に彼等の方に振向いたと均しく彼等は後退去つて仕舞つた

十二月九日、アダンリナンウンヂに歸つて來た、而してヂンバンセーを勝ふことが出來た、是は猫の種類で、身体の大きさも四ピヤー餘ある、又年も經つて居るやうである、我々は幾度もゴリールは見たが、ヂンバンセーを見たのは是が初めてゝある、是は此邊の奴隷の投槍の爲に殺されたのである

十二月十日、グルタ號はガボンへ歸つた

十二月十一日、ヌコンベーが來て、獨木舟を組立ることに盡力したが、是はオゴウエーを再び上るに就ての必要があつたが爲である、而して今年程種々な騷動のある年はなかつたと云ふことである

十二月二十七日、吾々が晩餐を喫しやうとして居つた時一婦人が來て、ヌコンベーが今此の近所まで參りましたが病氣が起つて到底此處まで來ることが出來ない」と云ふことを報じたから、直に予はウオカー氏と共に往つて見ると、果せる哉例の太陽王ヌコンベーは樹に倚かゝつて憐れなる姿をして居る、彼に隨從して居る婦人等は只々茫然として取圍にて居るのみである、彼は甚く憔悴して殆と以前の有樣はない、眼は凹み、顏色は蒼白く、頰は殺げて居る、予が來れるのを見て「貴下よ御覽の通り予は毒殺されて今時に死なんとする」と最と憐れなる聲の下に言ひ放つた、我々は彼の勇氣を恢復してやろうとして、小屋に擔き入れ、ウオカー氏が切りに之を看護しやうとしたけれども、如何せん隨いて居る者等は藥を服ませない、彼は床の上に臥て居るけれども僅かに呼吸をして居るのみである、婦女等は彼が眠つて再び目の覺めないことを氣文つて非常な騷をさして起さうとして居る、殊に北中の二人の如きは寢臺の上に坐つて種々なる方法を盡して眠らせないやうにする、翌日彼は非常な大熱を發し、狂態を演じ、終に起き上り樣刀を執つて自分の傍らに居る婦女等を追かけて殺戮しやうとした、吾々は漸くにして之を取り押へ、彼を慰めて小屋に入れたが、是より彼は小屋

より出て來なかつた其日の正午頃になつて彼は吾々を呼んだが故に予はウォカー氏と共に其許へ往つた所が彼は何か藥を請求した依つてウォカー氏は、「予は貴下に藥を與へやうと思ふけれども貴下に附從して居る婦女等が藥を與へることを嫌はない」と言ふたヌコンベーは「それならば最早仕方がない何卒彼方へ往つて呉れろ而して予を死なして呉れろ」と答へた

ガロアー人は此小屋の前を往復して、ヌコンベーの居る前などに立つて、而して奇妙な聲を出し「吾々の王は今將に死せんとする、之を殺したる者は盛り殺されるだらう」と云ふやうな歌を唄ふ憐れなるヌコンベーは總て是等の聲を聞いて居る時としては熱の爲に怪物が現はれて來て自分を殺さうと云ふやうな有樣をする、さうすると、彼は床上より飛び下り、此の怪物と鬪ふと云ふやうな態度をなす、而して婦人等は漸くに彼を捕へて臥さしめる

十二月二十九日我々を導く爲に、レノックス及び其他を雇入れた、ヌコンベーは斯の如き容体であるが故に行を同じうすることが出來ないランバンヤーに至りし時に道路の説によつてヌコンベーの死んだと云ふことを知つた其葬式は必らず一奇觀を呈するだらうと云ふ事と且つ此地方に暴民が起らうと云ふ虞れがある事との二つの爲に再び歸つて來ることになつた村へ到着すると諸處に火を燃して其炎は天を焦さん計である、即ちガロアー人が酋長の死んだと云ふことを知らせんが爲に火藥を燒くのである

死せるヌコンベーは一の長棉子の上に椅かゝらせられて、最も奇觀なる衣服銀糸を以て飾られたるチョッキなどを着せられてある、其足の間には笠或は杖などが置いてあつて、彼方には一婦人が駆りに死骸の頭を動かして居る而して此處へ來て死骸に向つて禮拜する者に返答をなさしめるやうな事をする、其他の二人は手を動かし二人の子供は

傍らに居つて熱涙に咽んで居る其他王の妻は從者を連れて其傍らに居つて泣き且つ叫けんで太陽王を殺害したる者を一日も早く發見せむことを願つて居る。

メコンベーは吾々が最後の旅行の間に、自分の村よりもう一層大きく且つ地位も好い所に位して居るガロアーが立派なる村を燒きに往つたことがある。其時に一人の女があつて、彼が水を飲まうとする時、其水、其水こそ海か迷入つて居たものだと部判する。太陽王が此村を燒と云ふ考を起したは外ではない、此村に居る一人が太陽王の所へ來て、其地政に就て歎願をした、或晩の事其者は獨木舟に乘つて河を渡つて、自分の敵を殺さうと云ふ考へで小屋の後方へ廻つた所が不幸にして敵は自分の伯父と食事を同うして居つた、夫れが爲に目ざす敵に見られてはならぬとて、身を隱さんとする一刹那過つて砲を放つた爲め思ひきや自分の伯父を殺して仕舞つた若も彼が伯父でなく自分の敵を

殺したならば別に左程の事もなかつたけれども敵を殺さずして自分の伯父を殺したと云ふことに依て、一の事件が起る原因になつたのである

同日嚴然たる儀式の下にメコンベーの死骸を二の運送會社へ運んで往つた、是は彼が死ぬ前の遺言であると云ふけれども、恐らくは何か從者共が慰的の物品を貰はうと云ふ考へで、斯の如き事をしたのだらうと思はれる

四時頃、一黑奴が來て、是非其棺に納める時分に自習人に立會を願ひたいと申し込んで來た、死骸は運送會社で拵えた大きな箱に納められるので其箱の下には大きな穴を敷いて、其上に種々な物を載せ其身體の周圍には笠、杖、帽子などを置いて、新しき布を以て死骸を掩き、其死骸の上にはコッヂの皿などを並べてあつて、其の上から酒、或は香水などを振かける、ア其箱を釘附にして仕舞ふ夜になつて此棺の前に集つて

頭りに騰りをする

十二月三十日此晩は火を燃して一人も眠らない此處へ魔術者が來てヌコンベーに藥を飲ませた所の婦人を發見しやうとする、其晩に死骸は何れへか持行かれて仕舞ふ、只之を持つて往つた者が死骸の在る場所を知つて居るのみである、此夜其奴隸を殺すことになつて居たが併し番人が居つて十分に警衛して居るが爲にがロア人は其希望を實行することが出來なかつた、夫故に明方になつて彼等は奴隸に向つて王が死なれたから今夜是非共鉄砲を發せよと命じた、然るに奴隸は狡猾であるから是に返答するに先方で第一に砲發したならば我々も鉄砲を發しやうと云ふことを以てした一般に此地の風習は女を殺さなければならぬことになつて居るが我々が居つたものだから遂にさう云ふ慘事は行なはれずにしまつた

十二月三十一日、吾々をロベーまで導き其荷物を運搬するに、一人に就て、二十五法を與へ其外旅行中に於て彼等の食物の重なる芭蕉の實を與へやうと云ふ約束をした、四時頃ウオカー氏の朋友なるカマと云ふ酋長が我々の所に來て因報を知せた、即ちアルタ號はロベー岬で、コミレッツールンゾに捕獲されて、白皙人は生檎となり、アモクルは非常な虐待を受けて居ると云ふことで、殊に土民は群を爲して河を上つてウオカー氏を殺さうと云ふ計畫中である、偖り白皙人を河から下へおろさうと云ふ態度であると云ふ一樣事である、是に於て我々は會議を開き我々の最も愛するコーヌといふ老黑奴を喚で之を相談相手にした處、彼も我々を助けることに就ては躊躇しないと云ふことである、而して全會一致を以て彼等に向つて戰ふと云ふことに決した、又がロア人も我々の爲に十分力を盡すと云ふ考へであるらしい是は恐く危險かないと云ふことを彼等が信じて居つたからであるたらう

千八百七十四年一月一日、念よ事態は急になつて來る若し敵が襲ふ

時分には、此邊の自分の居る所の家を捨てゝ、此村に集つて來ることに決議をした而して防禦上に十分力を盡す手配をして予は工兵及び城壁の司令官となつた夫故に予は先づ第一に二百迷以内の樹木を伐つてさうして運送會社に在る密樹を持つて來て、三段ばかりに置いて、其後方に兵士が隱れて是れより鐵砲を打ち出すことにした、此處に一個の小屋が在つたから軍器上是非共此家を燒かなければならぬ爲めウオカー氏は其所持者に向つて、十分に金を與へやうとしたら彼は承諾しない、併ながら愈よ戰端が開かれた以上は此小屋も到底滿足して居らぬと云ふことを信じて居るらしい金林がロア人は愚昧の人間であるから共に聞ることは出來ない何か物さへあれば掠奪しやうと云ふ考を持つて居るのみだ

彼のヌコンペーを藏匿したと云ふ嫌疑者の婦人は何れへか逃亡したが、其女の代りに二三の男を捕へた而して之は嚴刑に處せられることに

になつて居る、吾々は此事を聞いて一策略を以て、此不幸なる人間を助け出した而して自分の手許に置くことにした

一月四日予はがロア人三十人と共に、大獨木舟に乘つて、河を溯る爲に他の三艘の船を探しに往つた、其中の一は即ちゥールンゾと稱する第一の敵村に在る吾が率ゐるがロア人は總て武器を携帶して其村に往つたが、予等は心中に必ず多少の戰爭は免かれまいと思つた然るに豈圖らんや、此村には獨として人影を見ない、蓋し彼等は探偵を使つて吾々一行が如何なる有樣で在るかを偵察せしめ情況を聞いて驚愕して恐らく總てか遁逃したに違ひない、是に於て予が引連れたる者等は靜肅を旨として火を燃すべきことを命じたが來た食事の終らざるに先つて酋長は此處に來たり予に向つて、「予は白皙人種の親友なることを、十分に知らせたい爲に來たのである」と云ひ而して獨木舟をば不相當な高價で予に賣つけた、予等はそれより歸途ゥューカッィゾと稱

する河に船を停めて、未だ成功せざる一の獨木舟を買取つた

獨木舟は一の大なる樹の幹を撫つて造られた堅固なもので決して壞れるなどゝ云ふ憂へはない先つ獨木舟を拵へんとするには、第一に船に適當なる樹を探し當て、地を離るゝ二迷位の所より伐て杖を拂ふて之を獨木舟に製するには、多くは樹を伐つた場所で幹を堀る併し若も水のある處より遠い時分には樹の有つた所で總てを成功せしめない只僅かに小さくして、而して畑菜や酒などを贈つて北川友を呼集め之れを曳かして河へ持つて來る、さうして水の中へ暫らく浸けて置く、水に浸つた後に水より揚げて乾かし、其内外を火で焦がす、是に於て始めて第一期の仕事を終る、而して此船が出來上ると、或は踊り、或は唄ひ種々なる騷ぎをした後、水の中に入れる、其後各自が集つて、之を適當な大きさに製する、總て出來上るまでは二ヶ月間の時日を要する彼等が川ある器具の如きは、最も幼稚で極めて小さな斧で十八迷乃至廿迷の長

さあるものを拵えるのである

黒奴は一般に事業などをするに就て怠がない、時の貴重なるなどは感じない、夫故に或場合には、六ヶ月も七ヶ月も掛つて成就しないやうなことがある、此木材はオクノ又はカンッヤなどで、獨木舟には最も適當なる物である、獨木舟の大きさは種々あるけれども長さ三迷より幅員四十糎迷位を始めとして、長さ十七八迷より二十迷、幅員一迷位あるものがある此大なる者に於ては三十五人乃至四十人の舵手を載せることが出來る船の中間より船首に至るまでは段々狹く、先は尖つて居る船尾に至る間は多少膨らんで居る、先の方に三四人の人が乘るが、是は最も船を漕ぐに熟練した者を乘せなければならぬ、則ち水流の形勢から其他の總ての事を熟知して居る者である、船尾に乘つて居る者は舵物を司る者で、此處には指揮者が乘り、而して中央には漕手が乘つて居る、

吾々はアダンリナンゴに往つたが、此日は一月六日である、直に此處を生立してガボンに送つた書簡は三通で其中の一通は必ず到着して居るとだらうと信じた、其通路に於いては隨分敵なども澤山見たけれども、彼等は我々の有樣を見て何れへか逃走して仕舞つた

一月七日、コンピエヤユ氏は大熱病に罹つて苦んで居るにも拘はらず周圍では色々な物音がして土人に薬を與へる夕刻一黑奴が來た、是ウオカー氏に事へて居るセネガル人のウヨセフと云ふ者で幸にデルタ號の好消息を持ち來つた、デルタ號はカモ人の爲に捕獲されなかつた、而してアモラル其他二三人の者は彼等の手に捕へられたけれども逃げて仕舞つたと云ふことである

一月九日、午後將に駐ぬんとする時分に、キソルフ氏の書簡を持つて來た者がある、夫によつてマラブー號が此處を距る數里の所に到着した事を知り得た、依て船長が水先案内を請求して來られたのである、夫故

に我々は直に獨木舟を用意して、コンピエヤユ氏と共に往つた、十二時になつてマラブー號に着したがキソルフ氏は我々の爲めに温き物などを拵えて馳走をして呉れた、其夜は船の中に明すことになつたが、マラブー號の到着は、予に此處を出立するの決心を促がさしめた、此處より一層甚しき未だ歐洲人の足跡至らざる未開の地に入るに先つて、親友の手を握ることを得たのは實に愉快であつた

第八章

一月十日、此地を出發した、がロア人は出發を延期しやうと云ふ考へであつたが、併しキソルフ氏は既に旅費の前拂をしてあると故に、是非共出發しなければならぬと云ふことを命じ遂に彼等は我々と共に出發することになつたものゝ、それでさへ十人ばかりの人數が缺けて居る矣にも關はず出發したが元來我々はハロベーに往くに就ては一人廿

五法づゝを與へる約束で豫め十五法を拂ひ殘額は歸つて彼仕拂ふとになし且つ予はレノックーが吾々と共に來ることに就ては大なる贈物をした、コンビエヤエ氏の病は未だ癒えず、吾々の獨木舟で出發した予はがロア人を指揮することになつた故先づがロア人の中より一人の頭領を選拔した、其の選拔されたのはヤンロと稱する一番の老人であつたが極めて無勢力な人間で殊に又スコンベーが死んだ以來がロア人は誰にも服從しない、尖故に予は、予が汝等の長で如何なる事があつても汝等の意の儘にはさせないと云ふことを宣告したのである、此日我々はフェチッシ岬に碇泊することになつた、此處ではコンビエヤエ氏がイチンカ人を引連れて待合はせることになつて居つた、レノックーは魔術者の如き眞似をなし旅中は無事安全にして一行の者に危險のないやうにと祈つたがロア人も此岬を過ぎながら妙な形容をして祈禱などをした、マラブー號は既に我々を越えて三四ミル先に碇

泊することになつた

ヤゾルフ氏は縱令水が退て居るにせよ、瀑布のある地まで登と云ふ考で翌日大に困苦して水の退て居る所を越すことが出來たが、洲のある所で舟が止つてしまつた併しビオエエ號が以前溯つた所より尙數ミルメ上にまで來たのであるがロア人はイチンカ人と常に天幕を張してをる、そこてがロア人は予を自分の側に置かうとする、コンビエヤエ氏はレノックーの側に蚊帳を張つて寢ることになつた、斯の如くしてロベーに至るまで同じ方法を以て天幕を張つたが、夜になるとレノックーは一行の者に沈默を命じて、而して演說を試みる、翌日は是非此瀑布の邊を過ぎなければならぬと云ふことを敎へる、而してがロア人には、彼は此近邊の王であると云ふことを宣言したがロア人は聊かも是に服從しないけれども只小聲で不服を唱へる位である

ガボンに於て雇入れし人足等は、只僅かに一人を殘すのみで二人の小

僕と職夫とは我々を見捨てゝしまつた、只僅かにチコレと稱する忠實なる子供は、予が行く所は、如何なる處までも隨從せんと云ふ決心を示した

一月十二日、サンキタを起えて、是より三ミルスばかりなる大砂洲の上に一夜を明すことになつた此晩大風が起つた爲獨木舟は流れんとする雖も是に向つて働かうと云ふ者はない、夫故自身電光を借りて、其有樣を見に往つた處半は水に浸されて居る始末ゆへ翌日は荷物を解いて乾かさなければならぬ事に立ち到つた

一月十四日、プレ、ウオローに到着した、此處はオゴウェー河の右岸で著き丘陵であるが、河の有樣は他と違ひはなく、此處で肉を買ふことが出來た、其肉はバカレー人が森林中に於て獵し得た二頭の象の肉であつて其四分の一を從者共に分與へる事ができた

一月十五日、アウゴグゥーと呼ふファッシの岸を過きた、是處は河の左岸に位して居る、黑奴は河の水を手に掬つて面して此島の方に向つて注き何か祈禱をする、岩が二つあるが恰も角の如く分れて居つて雨期に於ては一迷位しか現はれて居らぬけれども、平燥の時期には三迷より四迷位現はれる、又ッレ、ッオローより河岸が非常に高くなつて來る而して種々なる光景が現れる是處は總て樹木が茂つて居つて、我々の連れて來た者等は時々船より下りて薪などを採つて來て船を繫ぐ材料とする我々は第一の瀑布に到着したが、メクエー河で見たより程は急激でない併しながら翌日はもう一層急激なる瀑布に遭遇すると云ふことである

一月十六日、此日はオコクと稱する村まで過んだ、それを過ぎ去つて、クンバと云ふ大なる村に往き、此河中に在る小島へ天幕を張つた、此邊の河流は最も激烈であるが河幅は最も狹い、僅かに五十迷位に過ぎぬ、夫故岩石に激する水勢は物凄く、四下の景色は實に奇絶で、海岸には滿爲

たる森林が位置よく排列されて居る、オコタ人は矮小な人民で、最も盜賊的性質を有し、婦人の如きは汚穢極つて居つて、風俗なども最も腐敗して居る、

オコタ人がオゴウエー河の島に棲み始めたのは、僅か今より十二年前の事で、其以前は河の右岸に棲息して居つたが、其處には草木なども富んで居つたが、バッファン族のオセーバと稱するもの等の爲に追ひ拂はれたのである、追拂つた彼等は其處に住つては居らぬけれども、オコタ人の爲には仇敵である、予が着た時分には丁度饑饉で、木の實又は雜草の實を食して、僅に其日を凌いで居るといふ、慘憺の光景であつた、將に出立せむとするや、予に隨從せし小僕が來て、オコタ人は我々に通行稅を拂はせやうと云ふことである、併し我々は既に此國を旅行するに付ては至る所の王などに、多少の贈物をしてあるから、決して他の者は我々から何事も取ることは出來ないと信じた、彼等の通行稅を

請求に來た者は、我々が怨る意見を有して承諾しないのを見て、立去つてしまつた

コンビエヤユ氏は予より先に此地を出發したが、愈よ予が出發せむとする時に、四人の者が何れへか立去つて歸つて來ない、其中の三人はオコタの村に彷徨つて居るのを捕へることが出來たが他の一人は分らないそこで一人のオコタ人を捕へて殘の一人の在所を問つたなら詐して遣らうと言ふたが、彼は何れに在るか知らぬと答へた、予は彼が言ふ事の虛言であると云ふことを觀破したが故に、オコタ人を船に止めて此處を出立することになつた、此に於て彼は大に怒いて實を吐いた、即ち一人のカロア人は予を距ぬ遠からざる所に隱してあつた事を白狀した、夫で在處が分つた故、彼を釋して、其上煙草の葉を與へた所、彼は大喜びの樣子であつた、是等の爲に遲刻した故にコンビエヤユ氏に早く出で會ふと思つて、船を急がして河の左岸を溯つた、然るに端なくも

一岩窟に遭遇した、それは地中深く進して居ると云ふことで、予は船を此岩窟中に入れやうとしたものゝ、隨從者は肯んじない、殊に此處には怪物が居ると云ふて慄いて居る、予は此岩窟は十五迷乃至二十迷の深さにして幅は六迷より七迷位であるから、一艘の獨木舟を以て進入つたならば僅かに鹿まで進することが出來ることを觀破して居つたのである、

黑奴等は肯んぜざるが故に已を得ず其處を出立して、エサベーと云ふ村に到着して、コンビエヤユ氏に會した、エサベーはエサベー島と名けられた島に在る村である、上陸して直に此處の王に贈物をせん爲、其居を訪ねた、王は立派なる小屋の中に我々を待たして置いたが、其處には見物人が群集して我々を眺めた、間もなく王は現はれて握手したが、彼の容貌は極めて醜に、身躰は小さく而も畸形で、且つ眇眼で人を睨める、自分の前の椅子に腰を掛けさせて、而して我々に何か贈物をすると云

ふことである、其器物の來る間、彼等の衣服を熟視した處、また見たことのない實に一種異樣なものであつた、彼の贈物は何かと見れば一頭の羊に鶏及び芭蕉の實である、是等は此國の風としては丁重の贈物である羊の如き此邊には至つて稀れであるので、予は是に就て十分に謝意を表したところ、王は大に喜んだ、扨て又我々が彼に贈つた物は、則ち火藥とか、或は布とか、燒酎などであつた、其中最も奇麗な贈物は亞弗利加の兵士の服でそれを直に着せたところ、少し小さひ而して之を着るのに殆ど十五分間も費つた、家來共が一方から腕を引くと、一方からは入れやうとする工合など予等をして圖らず絶倒せしめた、王は之を着るや否や散歩に出掛けた、而して傲然として人民等に見せびらかして居る、

翌日出立に際し、コンビエヤユ氏は一人のイチンが人をして叫ばしむるのに、オコタ人は今戰爭の用意をして居るから、早く歸つて貰ひたい

と云ふことを以てした、是に於て乎、予は隨從して來りしがロア人に火藥の用意をさして、コンビエヤユ氏の、所に來たが、豈計らんや其人間はオコタ人でなくて、彼のエヤベーの王で何かもう一層贈物を借やうと云ふ考へであつたのである、依てコンビエヤユ氏はラム酒などを與へた所、彼等は斯くすれば飽くまでも種々なる物品を得ることが出來ると思つてか頻りに出發の効害を試みた、是れでは際限がないからがロア人を上陸せしめて、彼等を十分に懲しめやうとすると、彼等は岩石の間に身を隱して叫んで曰ふのには、『此處に來ることなれ、我々は再び斯の如き事を爲さず』などゝ頻りに罪を謝したから、吾々も之を赦した、

此地を發して岸に附いて進んだ、舵手共は高聲に唄ひつゝ、エヤベーの勇氣なきを嘲けりなどした、其中此笑聲が止むと同時に吾々の船は最も危險なる所に到着した、眼前には無數の瀑布が流れて居る、斯の如き

急流を越す時分には可成中央を往かないで、岸の方に寄つて進むことにしてある、此間黑奴の船を操つるの巧みなるには實に一驚を喫した

一月十九日、夜に入つてアリンボンゴと呼ふ處に到着した、此邊には道路の實が非常に多くして、食料に缺けるやうなことはない

一月二十日、小使がガロア人は此處で吾々を捨てゝ一日も早く己が家に歸らんとする企でがあると云ふことを密告した、船はオットンビ山の麓に到着したが、此山上には湖水があつて、樹木は生ひ繁つて居る、此邊の森にはゴリールと豹とが澤山居ると云ふことである、果して接息して居るのやら確信することは出來ないのみか、一刻も遲くれるは不得策であると考へたが故に、探險の爲上陸しなかつた、此邊には數知れぬ小島が散在して居る

一月二十一日、アビンヤに到着した、此地には王が居らぬ故に、贈物をば其中の最も長老者にした